MESA/BOOGIE®

KING SNAKE™

取扱説明書

Hello from the Tone Farm

MESA/BOOGIEのアンプを選択されたあなたは、とても賢明なプレーヤーであり、且つ、直感力に優れた方です。それと同時に、アンプメーカーとしての我々に、絶大なる信頼を抱いているということですね。我々は、その期待を重く受け止めています。このアンプを選択して購入されたということは、このアンプがあなたの音楽を表現する体の一部になったという事であり、同時に、あなたはMESAファミリーの一員になったのです。ようこそ！

我々の目指すゴールは、決してあなたを幻滅させる事はありません。偉大なアンプのオーナーになった今、MESAの先人達が築き上げてきた様々な真空管アンプの伝統、そしてその上に新たに積み上げられた技術の全てを、あなたは享受できるのです。これから、このアンプがあなたの音楽制作を触発し、多くの喜びを与えてくれる事は間違いありません。それは、これまで培ってきたあなたの奥底に眠る音楽に対する意欲や情熱を導き出す事であり、我々はその手助けが出来ればと願っています。・・・私達の新たなる友へ捧げます。

使用上のご注意

この説明書を読んで下さい。

この説明書をなくさない様に保管して下さい。

注意事項を必ず読んでからお使い下さい。

安全事項にも従って下さい。

水の近くで当製品を使用しないで下さい。

汚れた時は乾いた布で拭いて下さい。

換気口を塞がないで下さい。説明書に従って設置して下さい。

暖房機器や、他のアンプなど、熱を発する機器の近くに置かないで下さい。無理やり、形の違うコンセントに挿さないで下さい。有極プラグは片方のブレードが幅広くなっています。アース付プラグは２つのブレードの他にアース端子も付いています。アースは安全の為のものです。自宅のコンセントに差し込めなかった場合、電力会社に相談して下さい。

電源ケーブルを踏んだり、曲げたりしないで下さい。

落雷の恐れがある時や、長時間使用しない時は電源ケーブルを外して下さい。

修理が必要な時は専門家に依頼して下さい。ケーブルがダメージを受けたり、本体が傷ついたり、濡れたり、落として壊れたりした場合、修理に出して下さい。

換気の為に本体の後ろに必ず10センチ程度のスペースを空けて下さい。換気口の上に新聞、テーブルクロスやカーテン、といった物を置かないで下さい。

ロウソクや火が付くような物を本体の近くに置かないで下さい。

濡れている物も本体の近くに置かないようにして下さい。

注意：安全のため、本体を雨や湿気に晒さないで下さい。

なるべくコンセントの近くに設置して下さい。

注意：必ず適切な接続をしてからアンプを操作して下さい。そうしないとアンプが故障する可能性があります。

直射日光や高い湿度は避けるようにして下さい。

必ずアースを接続して下さい。

解体したり、ヒューズやチューブを交換したりする前に必ず電源ケーブルをコンセントから外して下さい。ヒューズを入れ替える時は、必ず同じタイプのヒューズを使って下さい。

動作中にチューブに直接触れないで下さい。

子供に触らせないで下さい。

故障を避けるため、ケーブルなどを接続する前に電源を切って下さい。

汚れを取るのに溶剤を使用しないで下さい。

必ず本体の裏に表示されている条件を満たすAC電源を使用して下さい。輸出モデルは各国の電圧に合わせてあります。お住まいの規定に従って電源に接続して下さい。

大きな音が出ますので、スピーカーに耳を近づけないで下さい。

Mesa/Boogieアンプはプロスペック用の機材ですので、規定に従って扱って下さい。

上記の取り扱い注意事項と安全管理事項を必ず読んで下さい!

KING SNAKE™

目　次

使用上の注意
概要 — 1 - 3
役立つヒント — 4 - 5

フロントパネル (コントロール)

VOLUME 1 — 6
VOLUME 2 — 6 - 7
MASTER(マスター) — 7
TREBLE (トレブル) — 7 - 8
MID(中域)/BOOST(ブースト) — 8 - 9
BASS(ベース) — 9
MULTI-WATT™(マルチワット)出力 — 9 - 10
STANDBY(スタンバイ)スイッチ — 10
POWER(電源)スイッチ — 10

リアパネル

FUSE(ヒューズ) — 11
REVERB(リバーブ)フットスイッチ — 11
SEND(センド)レベル(EFFECTS LOOP) — 11
SEND(センド)/RETURN(リターン) — 12
SLAVE(スレイブ)レベル&出力 — 12
PRESENCE(プレゼンス) — 12 - 13
SPEAKERアウトプット — 13 - 14

サンプルセッティング — 16
ユーザー・セッティング・テンプレート — 17
真空管のノイズについて — 18 - 19
スピーカー・インピーダンス　マッチング/接続ガイド — 20 - 25
真空管交換チャート — 26
パーツ・シート — 27

KING SNAKE™

取扱説明書

1971年、ビンテージ・ギターアンプサウンドとモダンサウンドのクロスロード(岐路)に二人のパイオニアが立っていました。それこそがランドール・スミスとカルロス・サンタナで、傍らにある小さなアンプが、the Boogie®でした。この二人のアーティストの情熱と創造性、そして献身性の交わりがその音楽の歴史の革命的な瞬間にあったということがまさに運命と呼べるべきもので、結果としてギター・トーンに永遠かそれ以上とも思える多大な影響を及ぼしました。その全てが新しく、世界中のプロギタリスト達の優れた耳をとらえたthe Boogieのサウンドはギターアンプの概念を覆し、また正統派のサウンドとして認識されることとなったのです。

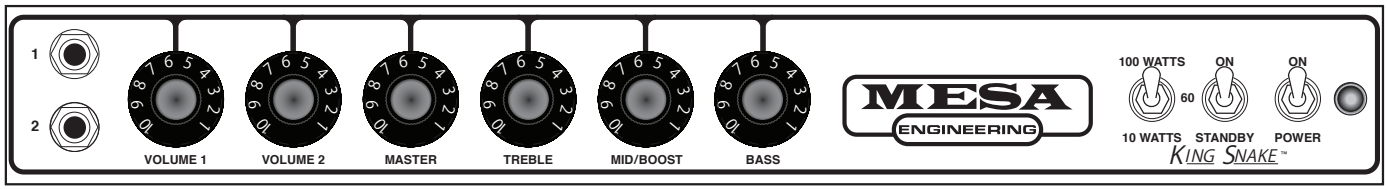
the Boogie®は、そのコンパクトな100W 1X12のコンボスタイル、チューブ・カスケードのハイゲイン・プリアンプ(サステイン)、Half Power(ハーフパワー)スイッチ(100/60)、プル・ゲインブースト、オン・ボードのグラフィックEQ、スレイブアウト、カスタム・ハードウッドキャビネットとそしてWicker Cane(籐編み)のグリルといった仕様で、全てが独自の革新性を持って`世界初のブティック(高級)アンプとしてMESA Engineering®のランドール・スミスの手によって生み出されました。

今回お選び頂いた、限定生産モデルであるKING SNAKE™は、サウンドとストーリー両方において伝説といえますが、理由はこのアンプが、その昔クロスロードに立っていたオリジナルBoogieの直系の子孫であるということです。Boogieは実際、過去のローゲイン・シングルチャンネルアンプと、今日のフットスイッチ操作可能なマルチチャンネルアンプを繋ぐ過渡期のモデルでありました。

Boogie® Mark I™が登場する前は、プレイヤー達はアンプのパワーセクションに起こるディストーションからオーバードライブサウンドやサステインを得るため、アンプの音量を本当に大きくしなければなりませんでした。その当時MESAだけが開発し得た小さなBoogieアンプに搭載されている、1970年に生み出された世界初のハイゲイン・チューブプリアンプによって、プレイヤー達はどのような音量でもサステインや歌うようなチューブ・オーバードライブサウンドを奏でることが出来るようになりました。革命的です！　あとの残りは歴史ですが - しかし実際にその小さなハイゲイン・ハイパワーの1x12 Boogieコンボがギターやポピュラーミュージックを変えたというのは本当です。そしてそのストーリーは終わってはいないのです！

KING SNAKEは、1972-1973年にカルロス・サンタナがツアーで使用したアンプのトリビュートモデルであり、そのユニークなシャーシサイズと年季の入った蛇柄のエンボスレザー・カバリングというデザインをそのまま採用しています。またそれだけではなく、43年間にわたって封印されてきた、もっとも秘密にされてきたいくつかの"トーン・ディスカバリー"も封じ込められています。変更点については、あるものは目に見えまたいくつかは見えない部分ではありますが、そのパフォーマンスや当時のオリジナルサウンドを再現するための柔軟性は更に向上しています。結果としてKING SNAKE™は、多種多様な音楽ジャンルで出力レベルも問わず使いやすく、更にエキサイティングな新しい可能性と表現力そして喜びが備わったアンプとして完成しました。

FRONT VIEW: King Snake™



REAR VIEW: King Snake™

概要：

KING SNAKEは、オリジナルのBoogie MARK Iのシングルチャンネルプリアンプと、2つのインプットを搭載しています。インプットの内の一つはトラディショナルな低いゲイン(INPUT 2)、もう一つはより高めのゲインのチューブオーバードライブとなります(INPUT 1)。どちらもそれぞれ独自のVOLUMEコントロールがあり、プリアンプでのゲインの量を調節できます。INPUT 2では、トラディショナルな低いゲインのクリーンサウンドを得ることが出来、またカルロスがシングルノートのソロを奏でるときに好んで使用するインプットジャックでもあります(彼のアプローチについては詳しく後述しています)。INPUT 1ではINPUT 2の前に更なるチューブ・ステージを経るため、より高いゲインとサステイン・歪みが得られます。

INPUT 2に接続すると、VOLUME 2のコントロールでプリアンプのゲイン量を調節します。INPUT 1が選択されているときはチューブ・ゲインステージが加わり、VOLUME 1とVOLUME 2のどちらもONになりお好みの量のオーバードライブになるようにブレンドされます。アドバイスとして、通常VOLUME 2をVOLUME 1より少し高めにセットすると良いでしょう。こうすると、よりリッチで温かみのある歪みが得られ、楽器によっては高次ノイズとなるような超過倍音を少なくすることが出来ます。また場合によっては、VOLUME 2をVOLUME 1より低めに設定して倍音を加え、よりブライトなトーンを得るという方法も好まれます。

オリジナルのMARK Iは外部A/Bボックスを使用すれば、基本的なチャンネル切り替えが出来るようになっていました。現代ではこのような方法は不十分であると考え、我々はKING SNAKEのシングルチャンネル仕様を最大限活用することに焦点をあてました。このシングルチャンネルを最大限に利用するという考えのもと、KING SNAKEはオリジナルのMARK Iとはポットの抵抗カーブが異なっているため、外部A/Bボックスを使用してKING SNAKEのチャンネルをスイッチングすることはお勧めしません。

標準的なコントロールの配列は、KING SNAKEの分かりやすい改良点の一つであり、ソウルフルなゲインシェイプを可能にしています。以前のカルロスのオリジナルMARK IはゲインブーストのON/OFFが可能でしたが、KING SNAKEはMIDコントロールノブでMIDブーストが調節可能になっています。MIDブースト時、0〜5までは通常のMIDの範囲で効きとなり、5〜10では素晴らしいオーバードライブが段階的に得られ、幅広いミッドレンジでゲインが増し、また得られる歪みが厚みをもったものとなります。

このシンプルでありながら信じられないほどパワフルな(パテント取得中の)MIDブースト機能は、どちらのINPUTのシグナルパスに繋いでもゲインを増すことができ、微妙な調節もかなりの強調も可能です。増加した歪みは"クリーンのエッジ"を加えるのに完全にマッチしており、プレイヤーが弾いたままのダイナミクスを持ってスムーズにクリップします。またINPUT 2での"スタイリスティックな"レンジのサウンドは、特に10Wまたは60Wのパワーモード時にMIDブーストの高域が効いている際に必要なオーバードライブサウンドとなるでしょう。またより強力な歪みを求めるプレイヤーはINPUT 1にギターを接続して、MIDブーストで厚みを加えるようにします。ただしその際はアタックやバランスを損なうことがないように気を付けて下さい。

KING SNAKEのもう一つのパワフルな武器は、パテント取得のMULTI-WATT™パワー選択機能です。MULTI-WATT機能は、プリアンプのスタイルや演奏場所等に合わせて出力を完璧に調整することが出来、また音量をそこまで上げることなく、より使いやすいレンジでパワー・クリップを加えることが出来ます。KING SNAKEでは3つの出力を選択出来、四つの6L6管全てを使用したCLASS A/B出力の100Wモード、6L6管四つのうち真ん中の2管を使用したCLASS A/B出力の60Wモード、そして最も左の2管を使用したCLASS Aシングルエンドの10Wモードとなり、この上なく甘くパワーがクリップします。

10Wモードにおけるシングルエンドのワイヤリングにおいては、第二次倍音がKING SNAKEのビンテージなキャラクターを引き出しており、昔ながらの低出力アンプの"マジック"サウンドを奏でます。MULTI-WATT機能は頭の中で思い描いたサウンドを実際に生み出します - それはパワークリップのことです - が、実際はかなり素晴らしいサウンドです。このアンプで得られるパワークリップは、まさに夢がかなったような素晴らしいものなのです！嘘だと思うのならKING SNAKEを10Wモードで演奏してみて下さい、凄く良いですから。

もう一つの革命的かつパワフルなアップデートは、スイッチ操作可能なPRESENCE(プレゼンス)回路の追加です。KING SNAKEで初めて採用されたこの機能は、二つのクラシックなPRESENCE回路(TWEEDとBLACKFACE)の内どちらかを選択可能です。これらの二つのPRESENCEは、正反対のレスポンスカーブを持ち、周波数帯もパワー部のダイナミックなキャラクターもそれぞれを新しくボイシングします。

BLACKFACEは、シングルノートに丸みを与える、より温かみのあるコンプレッションのかかったサウンドを生み出し、アタックに輪郭を、減衰の際にスムーズさをもたらします。PRESENCEの回路についてはカルロスはこのセッティングを好み、彼のオリジナルのMARK I "スネークスキン(蛇皮柄)"でもこちらが選択されています。TWEEDはKING SNAKEのレスポンスをより前目に持って行き、稲妻のような素早いアタック、充分なトップエンド、タイトなローエンドを実現しています。TWEEDは、BLACKFACEにはない高次倍音の重なりを演出し、よりアグレッシブなゲインを伴ったサウンドに適しています。このスイッチング可能な回路は、ビンテージサウンドとハイゲインサウンドという二つの異なるの方向性をKING SNAKEで可能にしています。クリーン/ハイゲインのどちらにセッティングしても、オリジナルのトリビュートであるだけでなく、過去と今日のアンプを繋ぐ役割を果たしていると言えます。

もちろん、このアイコン的なアンプを改めて作るというのに、あの素晴らしいリバーブ抜きということがありえるでしょうか？迷うまでもなく、KING SNAKEにはREVERBが搭載されており、完全なビンテージスタイルです。オール・チューブ、3本のスプリング、長いリバーブタンクという仕様により、オールドスクールの雰囲気を完全に封じ込めています。深みや倍音、減衰時間そしてスプリング構造的な特徴が一つになり、美しく深みのある素晴らしいサウンドを生み出します。小さめの部屋で立体感を生み出したり、多彩な使い方が可能なレトロな雰囲気のリバーブです。

シリーズのEFFECTS LOOP(エフェクトループ)はアンプのリアパネルに配置されており、SEND LEVELコントロールで調節可能です。SEND信号を微調整することで、ラックエフェクトやペダルタイプのエフェクトに対応します。使用する際は、最初にSEND LEVELをゼロにして、ゆっくりと最適な音量になるまで上げるようにします。KING SNAKEでは充分なSENDの強度がありますので、SEND LEVELコントロールの設定が9〜11時ぐらいの低い位置でも最適なレベルを得ることが出来ます。また常にオーバードライブ/コンプレッション/ワウエフェクトはエフェクトループではなく楽器とアンプの間に設置したほうが良いパフォーマンスを生みます。またよりストレートなスタイルがお好みの場合でも、エフェクトループジャックにケーブルが接続されていなければ、エフェクトループはハードバイパスされ、シグナルパスから完全に外れます。

SLAVEアウトジャックとLEVELコントロールは、プリアンプとパワー部のサウンドを完全にとらえ、外部のパワーアンプやキャビネットに送ります(主に大き目の会場での使用が目的です)。

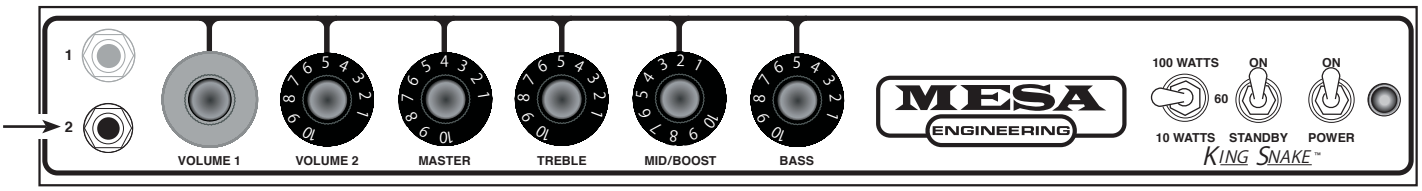
そして遂に、Fillmore KS-100スピーカーが世界デビューを果たすことを誇りをもってアナウンス致します - Fillmore™製ギターアンプ用スピーカーとしてラインナップされる、新商品二つ目となります！過去9年間に及ぶ世界中の会社との打ち合わせと、500ものプロトタイプの製作を経て、Eminense社にいる長年の我々の友人が間違いなく届けてくれました! 我々の執念と彼らの勤勉さが一つになって、イギリス製の黄金時代のスピーカーをライバルとした、いくつかのアメリカ製ハンドメイドのスピーカーが誕生しました。KING SNAKEの魂は、この新しいFillmore製KS-100によってより高められ、多くのプレイスタイルに対応する柔軟で素晴らしいサウンドを持ちつつ、クラシック・サンタナサウンドに賛辞を示すには完璧と言えます。我々はこの新しいスピーカーに本当に興奮しており、偉大なスピーカーのトーンに新たな時代を築くものだと感じています。

KING SNAKEは、我々とカルロス・サンタナとの間の40年以上になる素晴らしい関係を祝うものであり、かつエレクトリックギターの歴史における決定的な瞬間を記念するものです。この限定品のアンプは2つの音楽的アイコンの証明のようなものです - アイコンの一つはスポットライトを浴び、もう一つは音楽シーンの裏に存在しています - そしてどちらも彼らの芸術性や遺産のことを本当に気にかけているのです。我々はこの特別なアンプを手にとったユーザーに楽しんでもらい、またそのサウンドやパフォーマンスから永きに渡ってインスピレーションを得てほしいと望んでいます。またこのアンプが演奏をより高め、サンタナがそうであったようにプレイヤーの新しいドアを開けるものとなるかも知れません。

クイックセッティング

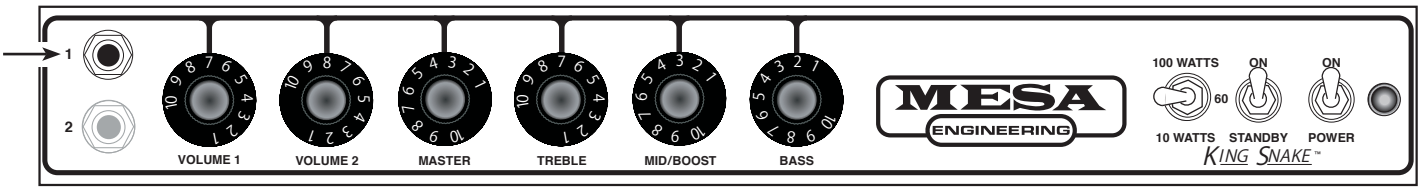
VINTAGE CLEAN

PRESENCE = BLACKFACE @ 2:00



CLASSIC MK I LEAD

PRESENCE = SET TO TASTE



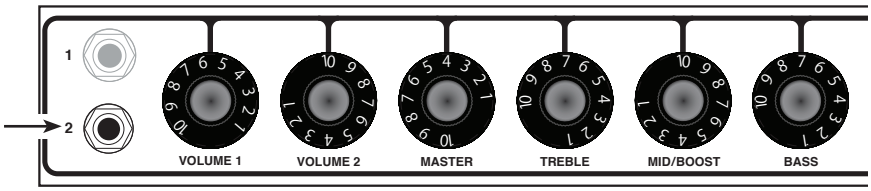
役立つヒント

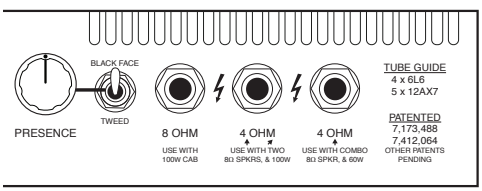
CLEAN(クリーン)
CLEANサウンドにおけるベストのサウンドは、INPUT 2を使用してVOLUME 2コントロールを4.0～6.5に設定したときに得られます。この範囲での低め(4.0～5.5)の設定のときは、よりヘッドルームの広い、高音がきらびやかなサウンドとなります。高めに設定すると、(低音または中音域で)パンチがあり、ローエンドが豊かで若干クリーンのヘッドルームが減少したサウンドとなります。ハムバッカーや高出力のシングルコイルを使用する場合は特に、このことを覚えておいて下さい。この範囲より更に低めの設定ですと、得られるゲインがかなり減ります。またそれ以上ですと、プリアンプが徐々に歪み始め、チューブ・オーバードライブサウンドとなります。

OVERDRIVE(オーバードライブ) : INPUT 2("クリップ"クリーン/"カルロス・サンタナ"リード)
INPUT 2でオーバードライブサウンドを得るには、VOLUME 2コントロールを7.0～10にセットして、TREBLE(トレブル)コントロールを7.0～7.5(またはそれより若干上)にセットします。これによりゲインが増し、INPUT 2のクリーン回路がフォーカスされて、オーバードライブにベストなサウンドキャラクターになります。必要があればリアパネルのPRESENCE(プレゼンス)コントロールを用い、BLACKFACE/TWEEDどちらのモードでもブライトさを抑えます。MID/BOOSTコントロールはINPUT 2のオーバードライブを増すように設計されており、5.0～10.0の範囲で使用すると中音域の広い範囲でゲインが加わり、均等に音が歪みます。

カルロス・サンタナのMARK Iを使用した場合の代表的なセッティングの一つは、INPUT 2を使用してコントロール群をこのようにセットします :
VOLUME 2 = 10.0 MID/BOOST = 10.0 BASS = 7.0 MASTER = 3.0～5.0 PRESENCE(BLACKFACEに設定) = 5.0～8.0

CARLOS SANTANA LEAD TONE





注意 : カルロスはBASSを非常に高めに設定します(これは彼のセッティングではうまく機能しています)。しかし低音弦(6弦または5弦)をよほど軽く弾かないと、膨張したようなサウンドになってしまいます。このようなことを避けるために、BASSは5.0以下に設定するようにして下さい。

OVERDRIVE：INPUT 1
INPUT 1では、INPUT 2のビンテージ・ゲイン回路の前にチューブ・ステージが加わり、更にドライブを増すことが出来ます。INPUT 1に接続すると、VOLUME 1とVOLUME 2が両方ともアクティブになります。ここで得られるドライブサウンドは、これらのカスケード・ステージでゲインがブレンドされたものであり、注意しなければならないのが、両方のVOLUMEコントロールの設定がレスポンスを変化させるということです。ハイゲイン設定にする際のベストなオーバードライブサウンドは、VOLUME 2をVOLUME 1より若干高めに設定することです。これにより、音に丸みがつけられ均一かつバランスの良い歪みが得られるのです。反対にVOLUME 1をVOLUME 2より高めに設定すると、音にゆるく倍音が加わり、よりブライトなサウンドになります。これはこれで良い効果となるのですが、やはりVOLUME 2をVOLUME 1より高めに設定することによる、豊かかつバランスの取れたサウンドを我々は好みます。

TREBLE(トレブル)
TREBLEが7.0以上の設定でゲインが加わりますので、INPUT 1または2のどちらに接続している場合でももう少し歪みが欲しいという場合は7.0～8.0に設定してPRESENCEを低めにします。二つは同じ周波数帯ではありませんが、TREBLE高めのセッティングでプリアンプのゲインブーストが出来、またサウンドもブライト過ぎず温かく丸くなります。

MID/BOOST(ミッド/ブースト)
MID/BOOSTコントロールは、0～5.0までの範囲では通常の中域コントロールとして機能します。5.0以上に設定するとゲインと倍音が徐々に加わり、時計回り一杯の10.0に設定すると音がほぼ完全に歪みます。このコントロールは特にINPUT 2に接続した際に有効で、クリーンのエッジやコードプレイ時の迫力のあるサウンドを求める際に持って来いです。またINPUT 2に接続してシングルノートのソロをオーバードライブサウンドで演奏する際にも効果的です(Bluesやクラシックロック、ルーツスタイルを演奏する際、クリーンチャンネルのダイナミックなレスポンスと同時に適度なオーバードライブを求めるときに最適です)。このMID高めのセッティングは、INPUT 1で(VOLUME高めで)使用すると少し過剰となり過ぎ、アタックを殺してしまうほど過剰に歪んでしまいます。MID/BOOSTは音を聴きながら控えめに設定して下さい。

BASS(ベース)
BASSコントロールはかなり強力です。INPUT 1または2でゲイン高めのセッティングにする場合や、VOLUMEコントロールを6.0～7.0以上にセッティングする場合、BASSコントロールをかなり低め(2.0～3.5)に設定して、アタックや音の輪郭をはっきりさせかつ低音がぼやけないようにします。シンプルに、以下のようにすればよい結果が得られます：VOLUME 1または2の設定を上げるときは、BASSを下げます。単純にこのようにすれば、よりバランスの取れた音やレスポンス、フィーリングとなります。

EFFECTS SEND(エフェクトセンド)
エフェクトセンドレベルは、2つのVOLUMEコントロールとMID/BOOSTそしてTONEコントロール(より小さい度合い)のセッティングに左右されます。エフェクターを接続する際は、最初にKING SNAKEのリアパネルにあるセンドレベルを"0"にしておき、それから徐々にお好みの音量になるまで上げていくと良いでしょう。

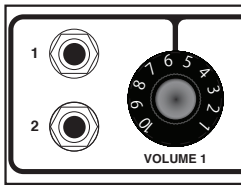
プレイヤーによっては、KING SNAKEの二つのチャンネル切り替えを行おうとして、外部A/Bボックスと2本のケーブルでINPUTに接続するかもしれません。オリジナルのMARK IとKING SNAKEはチャンネルスイッチングが出来るアンプとしてはそもそもデザインされておらず、A/Bボックスの使用でそのような使い方ができるともいえますが、そうでなくても多様なセッティングが出来るアンプです。あるセッティングでは可能かも知れませんが、やはりKING SNAKEはその単一チャンネルでより最適な動作が出来るようにデザインされたアンプであり、チャンネルスイッチングを行うことには向いていません。またMARK Iのシリーズと違い、KING SNAKEはINPUT 2よりINPUT 1でより小音量かつ優れたサウンドセッティングが可能です。これは、MASTERコントロールに"デュアル-エレメント"ポットが使われており、選択するINPUTによって異なるエレメントが用いられるためです。もしチャンネルスイッチングにこだわる場合は、TONE BURST™のようなクリーンブーストをINPUT 1に接続して音量を補い、2つのINPUT間のバランスを取るようにします。

PRESENCE(プレゼンス)：BLACK FACE(ブラックフェイス)= WARM, ROUND & LAID BACK
PRESENCEコントロールのBLACK FACEモードを使用すると、よりアタックに丸みのある、スムーズなエンベロープ曲線を持ったサウンドになります。BLACK FACEはまた、ダークで厚みのあるレスポンスと生き生きとしたローエンド、またトップエンドが抑えられたサウンドです。このセッティングはボーカルのような性質を持っておりシングルノートを演奏するのに最適です。またゲインをタイトに保ちながらよりスムーズにクリップします。

PRESENCE(プレゼンス)：TWEED(ツイード)= BRIGHT, TIGHT & FAST
PRESENCEコントロールのTWEEDモードを使用すると、反応が速く正確でよりブライトなサウンドキャラクターとなりますので、音抜けを良くしたり、BLACE FACEモードでは得られない高次倍音を多く含んだサウンドが欲しいときに最適です。また、クリーンセッティングでのコード弾きではチャイムのような、きらきらしたヘッドルームの広いサウンドとなります。この高次倍音はモダン・ハイゲインサウンドでは必要不可欠なものであり、トップエンドのサウンドにスピードと攻撃性が加わります。またハイゲインセッティングでもローエンドはタイトかつ輪郭がはっきりしているので、ドロップチューニングにも最適です。

VOLUME 1:

このコントロールでINPUT 1のチューブ・オーバードライブステージに入るゲインを調節します(構造的にINPUT 2のジャックとチューブステージの前になります)。それは例えばオーバードライブペダルがゲインをブーストしアンプの入力段で歪ませるようなもので、



VOLUME 1のコントロールで(それ自体増幅が可能である)INPUT 2のクラシックゲインの"前の"追加チューブステージで信号強度を増し、厚みがあって複雑なオーバードライブを生み出します。

KING SNAKEのプリアンプ部はこのように考えることも出来ます：INPUT 2は、設定が6.0以下だとクリーン、10に達するとマイルドなクリップと歌うようなドライブが得られるトラディショナルなゲインを持ったビンテージアンプである。もし音量の大きなクリーンサウンドがどうしても必要であるという場合は、このビンテージ・ゲインはMID/BOOSTの高めのセッティング(5.0〜10.0)で真のオールチューブ・オーバードライブが得られます。INPUT 1を使用すると、INPUT 2のトラディショナルアンプの前でハイゲインなチューブステージが得られ、スレッショルド・クリップが起こり、二つのVOLUMEのセッティングで完全に歪んだオーバードライブサウンドが得られます。尚、VOLUME 1の設定はINPUT 1のチューブステージにだけ影響しますので、INPUT 2に接続時はVOLUME 1の設定は気にする必要はありません。

前述の「役立つヒント」の項で述べていますが、VOLUME 1の設定はVOLUME 2と同じか、若干低めに設定したほうが良いでしょう(例：VOLUME 1=5.0 VOLUME 2=7.0)。最大まで歪ませたい場合は、VOLUME 1の設定を8.0に、VOLUME 2を10.0にして下さい。そのほうがよりはっきりしたスムーズなオーバードライブとなり、温かみがあって丸い、不自然な倍音のないサウンドです。

MID/BOOSTはシグナルパスの下流のほうに来るため、どちらのINPUTにもゲインを加えることが出来ますが、主となる目的はINPUT 2を使用した際にドライブサウンドを追加するためです。

注意：MID/BOOSTとVOLUME 1をどちらも高めのセッティングにして使用すると、音が歪みすぎてしまいアタックを殺すことになってしまいます。また極端なセッティングはプリアンプ管の限界を超えてしまい、真空管からマイクロフォニックが生じることがあります(高音のノイズが出ます)のでご注意下さい。

重要！：どちらのINPUTに繋いでも、VOLUMEコントロールはTONEに影響を与えます。基本的にゲインを低めに設定すると、歪みが少なく薄い、よりブライトなミッドカットのサウンドになります。ゲインを高めに設定すると、歪んでいて分厚く、かつ温かみがあって丸い、アタックにコンプレッションのあるサウンドになります。このことを念頭におきながら、VOLUMEコントロールの異なる組み合わせ(1が低め-2を高め/同じ/1が高め-2を低め)をリアパネルのPRESENCEも同様に組み合わせれば、ありとあらゆるサウンドを手に入れることが出来ます。

注意：KING SNAKEは、BASSの帯域がかなりがっしりとしていますので、VOLUMEを上げるときはBASSを下げるようにして下さい。BASSの効いた重いサウンドにかなりの歪みを(またはその反対)加えると、アタックやプリアンプの特性が失われがちです。尚、通常のBASSのセッティングより低めにも関わらず、タイトでバランスの取れたサウンドを得られたとしても驚かないで下さい。また、VOLUMEとBASSの関係は、MID/BOOSTコントロールを高めにセッティングする際にも同様の注意が必要です。

VOLUME 2:

このINPUTとゲインコントロールは、INPUT 1に接続している場合はゲインの第二ステージを調節し、INPUT 2に接続している場合は第一ステージを調節します。またINPUT 2に接続している場合、このコントロールは"ビンテージアンプ"のようにプリアンプの増幅を調節します。

低め(3.5〜5.5)の設定では、よりブライトでミッドカットされた、ヘッドルームが広いトップエンドがベルのようなサウンドとなります。高め(5.5〜7.0)では徐々に真空管が歪み、ローエンドにエアー感があって立体的なサウンドになります。VOLUME 2を7.0以上に設定すると、真空管の歪みが支配的になり、かなり出力の弱いピックアップを使用したときしかクリーンのレスポンスは得られません。このようなセッティングで多くの伝統的なBLUESやルーツミュージック愛好家が演奏し、ソロを弾かずにギターのボリュームを使いながらクリーンンサウンドでバッキングをします。

単純に、JAZZやFUNK、クラシックなカントリーやレゲエ、スカやロッカバラードのイントロなんかは、INPUT 2に接続してVOLUME 2のセッティングを4.5〜6.0あたりにすれば問題ないでしょう。BLUESやクラシックロック、新しいタイプのカントリーやソロ演奏時に、より素早いレスポンスやマイルド〜ミディアムぐらいのオーバードライブが必要な時はVOLUME 2を7.0〜10.0の範囲に設定します。

注意頂きたいのが、INPUT 1に接続しているときはVOLUME 2もONである(動作している)ということで、VOLUME 2の設定がVOLUME 1よりも高いほうが通常はより良いサウンドになります(輪郭と温かみを持ち、アタックが丸くなって不必要なノイズも少なくなります)。または思い切ってVOLUME 1のセッティングから数目盛り高くVOLUME 2を設定します。大体のソロ演奏にはVOLUME 2を8.0に設定すると良いでしょう(充分な温かみと爆発するようなアタックを伴ったスムーズなオーバードライブサウンドが得られます)。より過激なゲインが必要であれば、VOLUME 2を最大にしてVOLUME 1をお好みのレベルになるように調節します(それが例え10.0でも、過激なゲインサウンドのために)。またより分厚い歪みが必要なときは、MID/BOOSTの高めのセッティングにおいてもゲイン付加が可能です。ただ、MID/BOOSTを使うときはアタックが潰れないように注意して下さい。

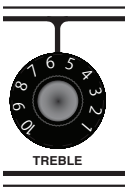
MASTER(マスター):

このコントロールでKING SNAKEのパワーセクションから出力される音量レベルを決定します。シグナルパスに関して言えば、MASTERコントロールは2つのVOLUMEコントロール(INPUT 1/2)やTONEコントロールそしてエフェクトループの後に来ます。しかしパワー部に行くドライブステージの前に来ますので、エフェクトループのセンドレベルには影響しません。MASTERコントロールは、ワット数に関係なく、クリップに到達するまでパワー部をプッシュします。もし二つのVOLUMEの設定が低めでMASTERが高めの場合は、パワー管の歪みからなるディストーション(オーバードライブ)が聞けるでしょう。

覚えておいて頂きたいのが、KING SNAKEは大音量が出るアンプだということです(特に60W出力モードと100W出力モード)。ですのでギターを弾き始める際は、最初にMASTERコントロールを"0"にしておき、それからSTANDBY(スタンバイ)スイッチをONにします。その後で、お好みの音量になるようにゆっくりと上げていきます。このようにすれば、スピーカーや耳に損傷を与えることを防げます。

TREBLE(トレブル):

TREBLEコントロールはKING SNAKEのボイシングを支配しています。このセッティングが全体的なサウンドキャラクターだけでなく、BASSやMID/BOOSTの量も決定しますので、豊かでバランスの取れたサウンドにするためには、細心の注意が必要となります。



このアンプにおけるTREBLEコントロールはゲインを少し付加するための設計がされており、オーバードライブサウンドに焦点を当てているため、他のMESAアンプより高めに設定されています(プリアンプの回路構造に類似点があるLONESTARは除く)。

クリーンサウンドでのコード弾きやバッキング等には、VOLUME 2を4.5〜6.0、TREBLEも同じぐらいの範囲に設定すると良いでしょう。この領域より下ではサウンドに温かみが出るため、トラディショナルなジャズや全体的にダーク目のサウンド(またはトレブリーなギターのバランスを取るため)に向いていますが、他のスタイルに適した、トップエンドの鐘のようなサウンドは出ません。5.0〜6.0以上に設定すると、 よりブライトさとシャープなアタックが加わりますので、あまり高くしすぎるとクリーンサウンドには不向きです。

INPUT 1/2どちらにおいてもよりハイゲイン・サウンドを得られるように、KING SNAKEのTREBLEは他の回路より少し余裕があるように作られています。そのため、ゲインが加わった際のタッチ(また歪んだリードサウンドのタッチ)が良い感じのものになります。例えばINPUT 2に接続/VOLUME 2を高めに設定している場合、何か足りないと感じたときに7.0〜8.0にセットすると良いでしょう。もし付加したゲインやTREBLEがブライト過ぎると感じたときは、単純にPRESENCE(またはどちらか)を下げると再び音を太くすることが出来ます。

INPUT 1で7.0〜8.0に設定すると、TREBLE特有の倍音を含んだゲインを付加する一方で、音をタイトにしたりBASSサウンドをクリアにすることが出来ます。8.0以上にするとよりサウンドが鋭くなりますが、同時にプリアンプ管がヒスノイズやマイクロフォニックノイズを起こしやすくなります。特に、VOLUME 1/2やTREBLE、MID/BOOSTそれぞれを、何かと同時に非常に高めに設定したときに同様のことが起こります。

注意：我々はこれら四つのコントロール(VOLUME 1/2、TREBLE、MID/BOOST)を同時に非常に高い設定にすることをお勧めしません。もし両方のVOLUMEコントロールで本当にハイゲインなサウンドが必要であれば、TREBLEとMID/BOOSTを弱めにして、代わりにPRESENCEでブライト差を補います。またはかなりブライトなTREBLEセッティングにしたいという場合は、一つまたは二つのVOLUMEコントロールを低めに、またMID/BOOSTも少し低めにします。TREBLEをブライトな(高めの)設定にするときは、VOLUMEの極端に高い設定は避けるようにします。

また、我々はこれら二つのVOLUME、MID/BOOSTそしてTREBLEについては、時間を掛けてそれぞれの設定でどのような音がするのか試してみることをお勧めします。それぞれの設定はわずかであっても音楽的には明らかな違いがあり、微調整でお好みのサウンドを作ることが可能です。

MID/BOOST(ミッド/ブースト)：

このコントロールは実際は二つが一つのコントロールに集約されているため、二つの名前が併記してあります。カルロスが1972～1973年にかけてツアーで使用したオリジナルのMARK I(スネークスキン)からの大きな改良ポイントは、かつては2ポジションのON/OFFスイッチだったのが、調節可能なポットになったことです。かつては(MIDの)トーンコントロールを持ち上げることによって大幅なゲインアップが可能であり、自由に回るロータリー・トーンコントロールでシグナル全体の調節が可能でした。これは当時実に素晴らしく革新的な機能でしたが、二つ欠点がありました。その内の一つは、ノーマルまたはブーストどちらかしか選べなかったことで、特にブーストポジションの歪みサウンドとの差によって、通常時とブースト時の音がかなり異なっていたということです。二つ目は、ブーストの選択によって信号全体が解き放たれるものの、TONEコントロールのためのゲインが残されておらず、BOOSTモードではほとんどトーンシェイプが出来ないということです。

当時は皆が新発見のゲインに魅了されて、サステインのためならこの交換条件は大したことと捉えられませんでした。しかしそこでMESA BOOGIEがTONEをそのままにするはずがありません。MIDコントロールの上半分に、調節可能なブーストを取り付けたのです！ もちろん上記の問題を全て解決したわけではないのですが、以前の、ゲインを付加する代わりにトーン・シェイピングする力を失っていた部分の中間領域を与えることになります。MID/BOOSTが最大(10.0)のときでも、TONEコントロールが出来るぐらいのゲインは若干残っていますが、極端なセッティングでは少なくなります。しかしながらこの方式は、ゲインとトーン・シェイプの好みのバランスを選択することが出来、ゲインを付加したサウンドのなかでまさにマジックと呼べる音が存在します。

MID/BOOSTコントロールを0～5.0にすると、少しばかり凝縮されたテーパーではありますが通常のMID(中域)コントロールとして機能します。この狭いテーパーでの通常のセッティングは、MIDを2～3より下にした状態です(おそらくあなたが考えるトラディショナルなスタイルのMIDコントロールのサウンドとなります)。

MIDコントロールを5.0以上にすると、調節可能なBOOSTコントロールとなり、TONEコントロールを徐々に引き上げて信号の強度が増します。プレイヤーによってはここで可能な限り最大のゲインを得ようとしますが、オリジナルのMARK Iのブーストモードがそうであったように、TONEコントロールでパワーに限りがあります。しかし逆に最大のゲインブーストを必要としなければ、広く温かみを持ったサウンドの、凄く使いやすい中域のレンジでブーストが行えます。

我々はこのシンプルでありながらパワフル、トーンの可能性を持ったこの改善ポイントに大変満足しており、サウンドと操作性の両面で優れたこの機能をMESA独自のものとして特許出願しております。最もシンプルなアイデアこそがベストである・・・また最も簡単であり、そのように40年に渡ってまっすぐ歩み続けています。特許庁の人がギターを弾く人であればいいのですが・・・祈りましょう。

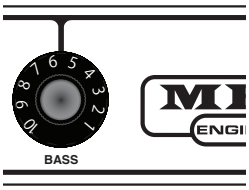
素晴らしいスレッショルドがクリップしたコード演奏のサウンドやBLUESソロのサウンドを作ったり、またはオーバードライブ・サウンドを厚くしたりトップギアに入れる場合に、どちらのINPUTを使用してもこのブーストは有効です。ただ覚えておいて頂きたいのは、ここには更にゲインがあり、まとまったアタックの性質を持ったバランスの取れたサウンドが保たれているということです。言い換えれば、ゲインを上げすぎるとトーンが残らないということです。単純ですが、しばしば見過ごされがちなポイントです。

注意：MID/BOOSTコントロールにおいて、通常のMID(中域)のコントロールとして機能するのは0.0～5.0の下半分です。上半分になると、最大の10.0になるまでゲインが徐々に加わり、最後はほとんど完全に音が歪みます。この上半分のセッティングは、VOLUMEを高めに設定してINPUT 1で使用すると、過度に歪み過ぎてアタックを殺すことがあります。MID/BOOSTは、音を聴きながら慎重に操作するようにして下さい。

注意：改めての注意ですが、VOLUME 1/2、TREBLEそしてMID/BOOSTの四つのコントロールを同時に高めの設定にするのは避けて、その代わりに少しずつ交互に調整するようにして下さい。もし両方のVOLUMEコントロールで本当にハイゲインなサウンドが必要であれば、TREBLEとMID/BOOSTを弱めにして、代わりにPRESENCEでブライト差を補います。またもしMID/BOOSTの帯域を気に入り、ここで最大のゲインを得たいと言う場合は、一つまたは両方のVOLUMEコントロールそしてTREBLEも低めにします。もう一度繰り返しますが、アタックを殺したりノイズを発生させたりしないために、ゲインを伴うこれら四つのコントロールを同時に最大の設定にするのは避けて下さい。

BASS(ベース):

このマニュアルの最初の部分の「役立つヒント」の項目で述べていますが、KING SNAKEはたっぷりとしたローエンドを持っており、慎重にセッティングしないとアンバランスな、膨張したようなサウンドになることがあります。VOLUME 1の項で前述されているシンプルなアドバイスに従えば、VOLUMEを上げるときはBASSを下げます。そうすればトラブルは起こらず、アタックもタイトでクリアなままです。



INPUT 2に接続してクリーンサウンドを演奏する場合は、結果を気にせず少し大胆にBASSを少し高めに出来ます。VOLUME 2の設定が6.0以下であれば(それが素晴らしいクリーンサウンドを得るベストセッティングですが)、アタックが潰れたりするまでBASSを5.0〜6.0といった具合に上げることが出来ます。これはもちろん楽器やピックアップ、または演奏技術次第でもあります。厚みのあるホロー・ボディのギターには5.0を上限としたほうが良いでしょうし、ソリッド・ボディ/メイプル・ネックのギターであれば、アタックが潰れたりするまでの例えば6.0ぐらいまで余裕を持ってBASSを上げることが出来るでしょう。
INPUT 2でオーバードライブ・サウンドにするなら、VOLUME 2の設定を高めにした分だけBASSを大幅に下げる必要があるでしょう。この場合、BASSのセッティングを1.5〜3.5ぐらいにして、しっかりとしたアタックと豊かでバランスの取れたローエンドが得られるようにします。

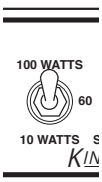
VOLUME 1でも同じルールが適用され、またそれはセッティングや楽器、ピックアップや演奏技術が関わってきます。ローエンドのゲインを、VOLUME 1(VOLUME 2でもゲインが付加されます)の設定で3.5〜5.0で得るとすると、BASSは4.0〜5.0ぐらいまで上げられます。VOLUME 1(またはVOLUME 2も)を上げれば上げるほど、BASSを下げてタイトなサウンドにする必要があります。ゲインを最大にするためには(VOLUME 1と2を最大)、BASSを1.0または0(OFF)にしなければタイトなアタックは得られません。

KING SNAKEは世界で最も温かみがあってファットなサウンドを生み出すアンプの一つであり、この小型の"大音量アンプ"でよくブレンドされたトーンを得るためには、サウンドメイクに是非時間を割いて欲しいと思います。そうすれば、あなた独自のサウンドを作り上げたり、楽器を交換したり、演奏スタイルを変えたりといったことが瞬時に可能になります。単一チャンネルのアンプであっても、KING SNAKEはいくつもの音楽的指向へ進むことが出来るのです。必要なのは新鮮なアイデアと機能について数分学ぶこと、あとは今まで経験したことのないようなソウルフルなサウンドを楽しむだけです。例えばパワーのあるよくチューニングされた車のように、その最高の可能性について学べば乗りこなす価値のあるものなのです。

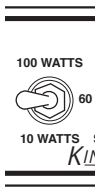
MULTI-WATT(マルチワット)™・パワー

KING SNAKEはMESAがパテントを取得しているMULTI-WATT™パワーを搭載しており、出力ワットやCLASS動作そして回路構造を三つから選ぶことが出来ます。単純に演奏場所の大きさに即して選んだり、またはどれだけアンプがクリップするかといったように、トーンで選ぶことも出来ます。三つそれぞれはサウンドもフィーリングも異なり、音楽的性質がユニークにブレンドされた本物のサウンドです。

100Wモード：このモードはKING SNAKEにおいて最も高出力となり、CLASS AB 5極管で配線されています。この配線が4本組の6L6パワー管にはもっとも効果的かつ音楽的となり、力強くかつ温かみがあるトーンを大音量で得られます。この出力モードでは、ローエンドが荒々しく、またタイトで最高のパンチを持ったサウンドとなります。また、そのサウンドキャラクターの大部分を占める形での、パワーセクションのクリップを求めるスタイルにはファーストチョイスではありません。



100Wモードは、特にJAZZのようなクリーンサウンドに適した、とても温かみがあって甘いサウンドをヘッドルームの上限無しに得ることができます。またハイゲインでのソロサウンドにも同様に適しており、迫力とダイナミックなパンチを伴った丸く太いサウンドとなります。KING SNAKEの凶暴な側面を体験してみるのであれば、まず4x12のクローズドバックのスピーカーキャビネットを繋ぎます。次にVOLUME 1と2の両方を有効にし、リアパネルのPRESENCEスイッチをTWEED側に、そしてPRESENCEコントロールを3.0〜5.0の間にセットすれば、恐ろしいほどにラウドでヘビーなロックサウンドとなるでしょう。



60Wモード：このモードを選択される時は、コンボアンプとして最大のパフォーマンスを得たいという場合になるのではないかと思います。60Wモードは出力やヘッドルームそしてトーンのバランスに最も優れ、ラウドに演奏できると同時に一定の音量でクリップさせることも出来ます。このモードでもまたCLASS ABの5極管配線となり、一定の音量とヘッドルーム、そして甘いビンテージなサウンドキャラクターと音楽的なクリップが得られます。

音質的には、60Wモードは少しブライトで生き生きとした、鐘のようなサウンドです。フィーリングとしては弾むようであり、しなやかです。我々も60Wモードはオールラウンドに優れているという認識で、三つのパワーモードの中でもベストではないかと思うのですが、実際カルロス・サンタナも最も気に入ってる出力モードなのです。

10Wモード：適当な音量で甘いパワークリップが必要であれば、いつでもこのモードを選んでください。パワー部は先のビンテージアンプに敬意を表したCLASS A シングルエンド方式となっており、スムーズにクリップし、パワー部にて温かみのあるオーバードライブサウンドが得られます。またシングルエンド方式は偶数次倍音を強調し(特に第二次倍音-演奏された音のオクターブ上)、オールドスクールなマジックサウンドである美しい艶と、トップエンドにシルキーでスムーズなフィーリングをもたらします。クリップさせたサウンドはほとんど継ぎ目が無く、この上なく音楽的です。また、パワーをドライブさせずに小音量で自宅練習に使う場合も、自然な倍音を持った、演奏していて喜びを感じるようなサウンドとなっています。もちろんスタジオでの使用時も、プリアンプをあまり上げすぎずにパワークリップをさせた最高のサウンド得ることが出来ます。

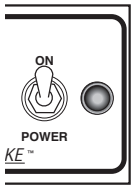
10Wモードは、VOLUME 1や2でゲインをすごく上げたサウンドには向いていません(特にMASTERやBASSも高めのセッティングにしているとき)。シングルエンド方式では、VOLUME 1や2が極端に高めのセッティングである場合ローエンドが正しく発音されず、またそれらの組み合わせによって低音部分がぼやけてしまいます。ただ、小型アンプをフルアップにした昔懐かしいサウンドを求めているのであれば、10Wモードで充分機能します。

STANDBY(スタンバイ)スイッチ：

演奏をしていない状態からアンプを使用する際に、トグルスイッチをSTANDBYの位置にして真空管(特にパワー管)の暖気を行います。まずPOWERスイッチをONにする前に、STANDBYスイッチがSTANDBYの位置にあることを確かめます。POWERスイッチをONにしてから最低30秒間そのまま待ち、それからSTANDBYスイッチをONの位置にします。この手順によって、高電圧が冷えた真空管を直撃することによるダメージを防ぎ、また真空管の寿命を伸ばします。

注意：重要です！
演奏中または何らかの信号がアンプに入力されているときはSTANDBYスイッチの切り替えを行わないで下さい。過大電流が流れてSTANDBYスイッチの破損につながります。

POWER(電源)スイッチ：



KING SNAKEに電源を供給するためのスイッチです。電源のアースがとれていることを確認して下さい。またコンセントにも適正な電圧が供給されていることを確認して下さい。

アンプを使用していない状態から演奏を開始するときは、STANDBYスイッチの項で述べている手順に従って下さい。

注意：より正しいインピーダンスのマッチングとレスポンスを得られるように、60Wモード時に8Ωの内蔵コンボ・スピーカー(もしくは8Ωの外部スピーカー)を使用する際は4Ωのスピーカーアウトの内の一つに接続して下さい。この接続方法によって、最大のヘッドルームと生き生きとして素早く、パンチのあるレスポンスが得られます。もちろん義務ではありませんが、多くのプレイヤーがこの接続方法でよりエキサイティングなトーンとフィーリングを得ているようです。

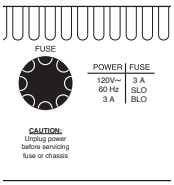
注意：付属の電源コード以外は使用しないで下さい！　付属の電源コードを使用した場合のアンプの損傷や事故は保証対象外となります。

ここまでがフロントパネル上の機能やコントロール部分についての説明です。ここからはリアパネルの機能について見ていきましょう。

リアパネル(コントロールと機能)

注意：KING SNAKEのリアパネルで使用されているノブにはフロントパネルのノブのように数字が入っていませんが、代わりに白い線がポインターとして入っています。この取扱説明書のリアパネルの項では、数字の代わりに時計の文字盤の時刻表記(9時、12時等)でセッティングの位置を示します。

FUSE(ヒューズ)：

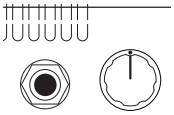


外的要因による電源の過大入力またはパワー管に問題がある場合にヒューズが飛ぶことがあります。必ずヒューズホルダーの近くに明記されているものと同じ規格のSLO-BLOタイプのヒューズに交換して下さい。

重要：SLO-BLOタイプ以外の"TIN-FOIL"タイプやその他のフューズに交換して、ヒューズをバイパスしようとしないで下さい。ヒューズに問題があると、アンプ自体の保護も出来なくなります。この警告を無視すると、保証対象外となりますので注意して下さい。

REV.FT.SW(リバーブ・フットスイッチ)：

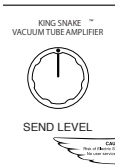
この楽器ケーブル用ジャックに標準の1/4"オスプラグを接続して、REVERBスイッチのON/OFFをリモート・フットスイッチで行うことが可能です。



注意：REVERBをON/OFFするフットスイッチは、シールドケーブルの使用で正しく機能します。シールドされていないケーブル(スピーカーケーブル)を使用すると、不必要なハムノイズを発生させます。REVERBのリモートスイッチを使用する際は、必ずシールド・ケーブルを使用するようにして下さい。

SEND LEVEL (センドレベル) (EFFECTS LOOP) (エフェクトループ)：

EFFECTループのSENDジャックに入るシグナルレベル(音量)を調節し、VOLUME 1と2、またTONEコントロールで設定されたレベルの補填を行います。MASTERはSENDステージの後になりますので、MASTERのセッティングはSENDレベルに影響しません。



それぞれのエフェクトプロセッサーに対応した正しい音量レベルやセッティングというものはありませんが、9時～10時が"ユニティーゲインに近い"と判断し、優れた品質のエフェクターのインプット段には"おおよそ"良いセッティングであろうと思います。この9時～10時の設定を安全なスタート地点として、ここから調節するのが良いでしょう。KING SNAKEはこの部分でも充分な量の信号を持っているため、SENDレベルの設定が12時以下でも最適な量の信号となることがあります。

SEND/RETURN (センド/リターン) (EFFECTS LOOP) (エフェクトループ):

これら2つのジャックは、KING SNAKEのプリアンプとパワー部の間におかれる外部エフェクターのインターフェースです。スイッチングタイプのジャックとなっており、ケーブルのプラグが差さっていないときはエフェクトループはバイパスされます。また、ループはドライ信号とシリーズ(直列)で配線されているため、お使いのエフェクターでエフェクト信号とドライ信号のミックスレベルを調整する必要があります。

エフェクトループはプリアンプとパワー部の繊細な接点であるため、ここに接続されるものは全てトーンの一部となります。この点に留意して、可能な限り高い音質を得られるようにして下さい。また同じく信号部分を担うため、楽器用ケーブルは高品質で短めのものを使用するようにして下さい。

またエフェクトループはプロレベルのエフェクターに最適化してあり、ペダルタイプもラックタイプも両方接続することが可能ですが、空間系(特にラックタイプではパラメーターでの操作が可能)のエフェクトを接続するのに最適です(ディレイ、コーラス、フランジャー等)。オーバードライブやディストーション、ワウ、エンベロープ系またはオクターバー等はアンプのフロント側(インプット)に接続したほうが、より良いサウンドが得られるでしょう。

何を使用または接続する場合でも、ケーブルの長さは出来るだけ短くしたほうが、ケーブルのキャパシタンスが増すことによる信号劣化(ハイ落ち)を防げます。

注意:KING SNAKEのパワー部のみ(追加のSLAVEアンプとして)使用する場合は、RETURNジャックをINPUTジャックとして使用します。またSENDジャックには、ダミーの短いプラグを接続してループ部へ信号が入るようにして下さい。

SLAVE LEVEL(スレイブ レベル)とOUTPUT(アウトプット)ジャック:

SLAVEアウトジャックとレベルコントロールで、プリアンプ部とパワー部両方のサウンドを出力することが出来ます。この機能は例えば大きな会場で他のパワーアンプを駆動させたり、エフェクトループを使いたくない場合に外部プロセッサーを駆動させることが出来ます。

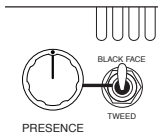
スピーカージャックから来ている信号を出力しており、ダイレクト・レコーディングアウトではないため、コンソール等に接続するには信号が大きすぎます。またスピーカーがそうであるように、高域のロールオフやシェイピングがされないため、音が小さくレコーディングには向いていません。もしダイレクト・レコーディング・サウンドが必要であれば、特別にデザインされたRECTIFIER RECORDING PREAMPのご使用をお勧めします。

注意:SLAVEアウトからの信号は大きいため、機器や耳にダメージを与えないように、何かを接続する際はLEVELコントロールの設定を最小の7時から始め、徐々に上げていくようにして下さい。

注意:SLAVEアウトからいったん信号が出力されたら、アンプにもう一度戻さないで下さい。フィードバックが起こり、PAスピーカーにマイクを向けたような大音量の金属音のノイズが発生します。

PRESENCE(プレゼンス):

KING SNAKEは、我々の40年の研究の中で最もエキサイティングかつドラマティックな、新しいトーン・オプションを備えています。それこそがスイッチ操作可能なPRESENCE(プレゼンス)です。皮肉なことに、その可能性に気付くのに我々は自身の歴史に立ち返らなくてはいけませんでしたが、とにかく今その機能があなたのアンプに搭載されたのです!



この精巧な回路はあなたに、PRESENCEの回路として最もクラシックな二つ(ほとんどのアンプにそれがありますが)を提示します　-ビンテージかモダンか-　そしてまた完全に新しいレベルのトーンシェイプの可能性を創造したのです。それだけにとどまらず、PRESENCEスイッチにおけるこの二つの選択肢は、KING SNAKEのシングルチャンネルの構造が"本物の"サウンドを持って異なるジャンルの音楽を横断することを可能にしているのです。

それぞれのPRESENCE回路は、明らかな強さとキャラクターを備えていますが、新しくそしてエキサイティングなサウンドシェイプを実験してみることには躊躇しないで下さい。これは新しい(特許出願中の)機能であり、他のMESA商品にも近い将来搭載が考えられています。これまで存在しなかったような柔軟性を与え、あなた自身のユニークなサウンドを見つけ出したり、ひらめきを与える手助けをすることでしょう。

BLACKFACE(ブラックフェイス)はロール・オフタイプのコントロールで、プリアンプ部の最後方に位置します。より温かみがありコンプレッションの掛かったサウンドで、シングルノートを丸くし、エンベロープを加えアタックをポップに、そしてディケイ(減衰)時はスムーズになります。パワー部には調整ポイントがなく、代わりに回路内の決まったセットのパーツが使われます。BLACKFACEはカルロス・サンタナが最も好むセッティングで、彼のオリジナルのMARK I "スネークスキン"のPRESENCE回路と同じものが使われています。このモードはクリーンサウンドに輝きを与え、丸いアタックとローエンドの効いた自然なビンテージサウンドを生み出します。TWEEDモードと比較するとよりジューシーで余裕があり、とげとげしかったり冷たい感じの無い、感動的なフレーズを追求したくなるようなサウンドです。

BLACKFACEはまた、どれぐらいオーバードライブしているかに関わらず、ボーカルのようなシングルノートのサウンドが勝っています。よりスムーズで、エンベロープのあるアタックと自然なコンプレッション感は、どんなゲインでどのインプットが選択されていても、サンタナ印の、記憶に残るようなメロディーを奏でるのに完璧です。INPUT 2に接続してVOLUME 2を高めにセットし、PRESENCEを11時〜3時ぐらいに設定すればソウルフルなBLUESのリードプレイに最適です。魔法のトーンが待っています!

結論:BLACKFACEは、低域の広い範囲をカバーしつつ、ブライトさが抑えられ、より自然なコンプレッション感のあるサウンドを生み出します。

TWEED(ツイード)は、実際に"パワー部のPRESENCE"であり、選択された周波数の負のフィードバックを起こします。音楽的にはそれがKING SNAKEのレスポンスを前に押し出し、光のように速いアタックとトップエンドのサウンド、そしてローエンドのタイトさを生み出し、特に複雑なバッキングを演奏する際に追従性を発揮します。TWEEDは高次倍音の層を生み出し、モダン・アグレッシブ・ゲインサウンドに必要な迫力と鋭さをもたらします。

TWEEDはまたクリーンサウンドでも良いサウンドを生み出し、BLACKFACEよりも歯切れが良い特性を持っていますので、複雑な音のミックスの中でも埋もれません。ここでTREBLEの設定に注意をしてもらわなくてはいけませんが、TWEEDは倍音が豊かでBLACKFACEに比べてアタックのスピードが瞬間的ですので、PRESENCEも高めの設定にしてしまうと少々危険です。

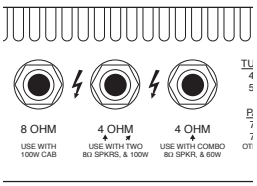
TWEEDモード時、PRESENCE低めのセッティングで良い"スレッショルド・ゾーン"があり、シングルノートのオーバードライブサウンドにもうまくマッチします。それは9時〜11時(他の設定にもよる)で、暗くかつコンプレッションの掛かったサウンドと、オープンでよりブライトなサウンドの変換地点です。このゾーンには多くの微妙なアタックの影とエンベロープの特性があり、ここで時間を使ってソロに適したサウンドを探す価値があります。TWEEDモードで、PRESENCEを1時〜1時半以上にすると、トップエンドのサウンドがより前に押し出されますので、この領域でヘビーなオーバードライブが掛かったコード演奏を行ったり、倍音が充分なクランチサウンドを生み出したり、といった具合です。

結論:TWEEDは、倍音やブライトさの領域が無制限であり、かつアタックやスピードが増します。またその倍音は、BLACKFACEの約2オクターブ上をカバーし、コントロールしています。

PRESENCEにおける、このスイッチ操作可能な回路とサウンドは、KING SNAKEの二つの個性をあなたのものにすることを許し、また真のビンテージサウンドとよりモダンなスタイルをこの一つのアンプで可能にしています。クリーンサウンドにしてもハイゲインにしても、過去のアンプと現在のハイゲインでフットスイッチ操作可能なアンプを繋ぐその唯一の存在に、より敬意を表しています。

SPEAKER OUTPUT (スピーカーアウトプット)ジャック：

これら三つのフォンタイプのジャックはスピーカーアウトで、内蔵の1x12コンボスピーカーまたは外部スピーカーキャビネットに接続します。KING SNAKEはミスマッチにも耐えうるように設計されていますが(16Ωスピーカーを KING SNAKEの8Ωジャックに接続する等)、2Ω負荷は真空管やトランスにダメージを与えますので、使用しないで下さい。



内蔵のコンボスピーカーと外部8Ωスピーカーを使用するには、両方のスピーカーの8Ωジャックとアンプの二つの4Ωスピーカージャックを接続します。これは正しいインピーダンスのマッチングであり、クリーンのヘッドルームも最大限使用できます。

4Ωのスピーカーキャビネット1台は、4Ωのスピーカーアウトプットジャックのどちらかに接続します。

16Ωの外部スピーカーキャビネット2台(例：二つの4x12キャビネット-それぞれをシリーズ・パラレルで接続された4x16Ωのスピーカーに)の場合は、それらを"Y"ケーブル/ボックスに接続し、"Y"を8Ωのスピーカージャックに接続します。この方法も同様によいインピーダンスのマッチングとなります。

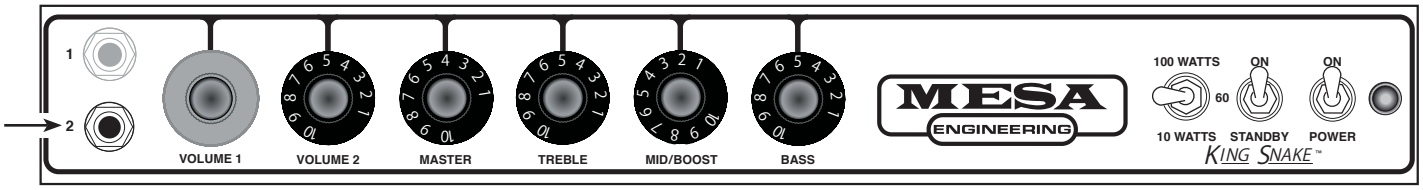
詳しい接続方法については、マニュアル後半のスピーカーインピーダンス・マッチングガイドをご覧ください。

NOTES

サンプル・セッティング

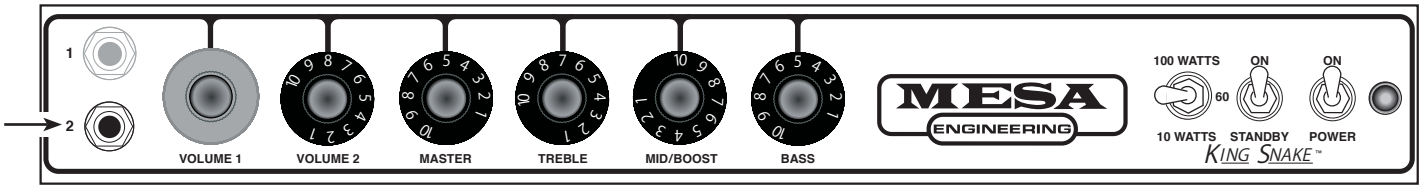
VINTAGE CLEAN

PRESENCE = BLACKFACE @ 2:00



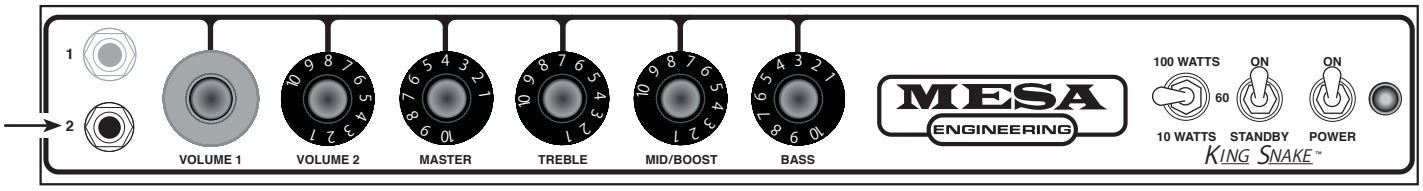
CARLOS SANTANA LEAD TONE

PRESENCE = BLACKFACE @ 3:00



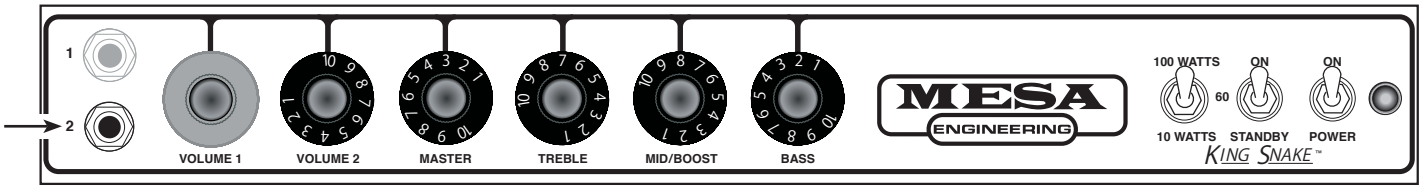
STINGING BLUES

PRESENCE = TWEED @ 12:00



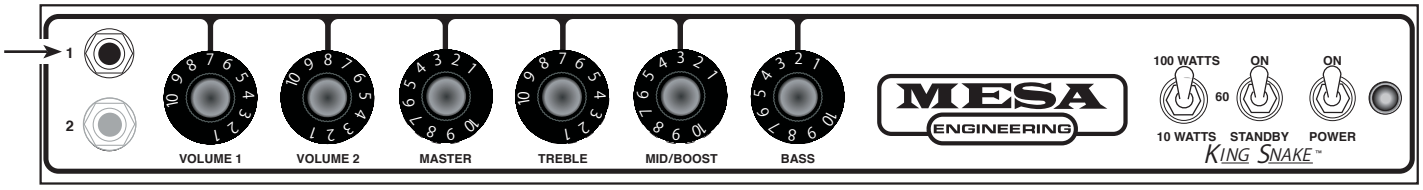
TIGHT CRUNCH

PRESENCE = TWEED @ 10:30



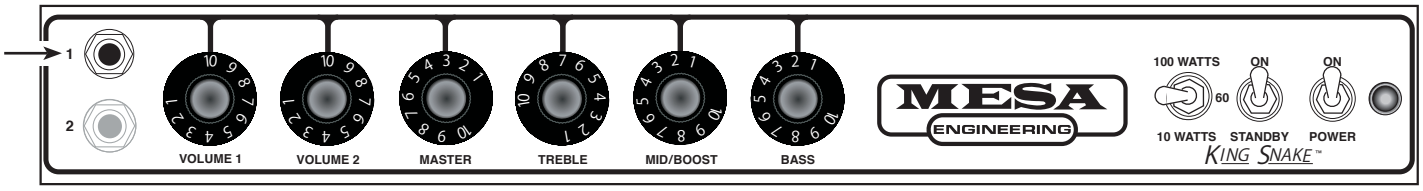
CLASSIC MK I LEAD

PRESENCE = SET TO TASTE

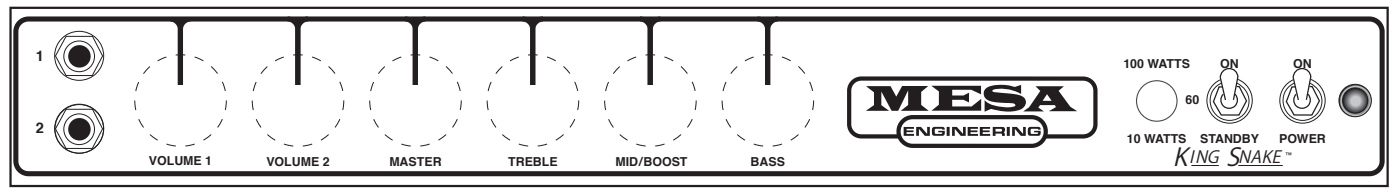


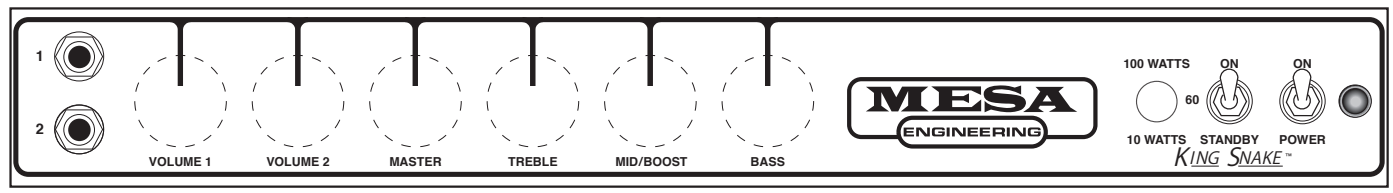
MOLTEN MK I

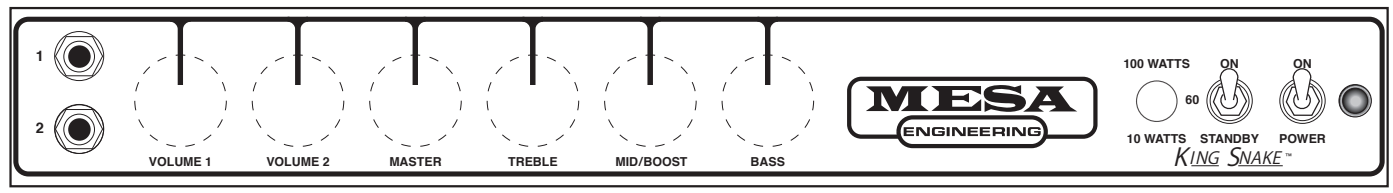
PRESENCE = TWEED @ 9:00-11:00

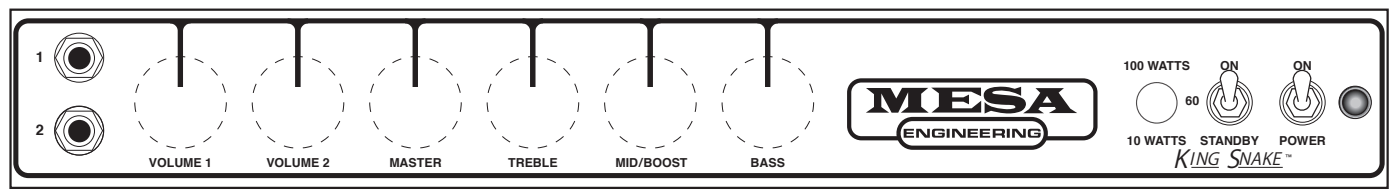


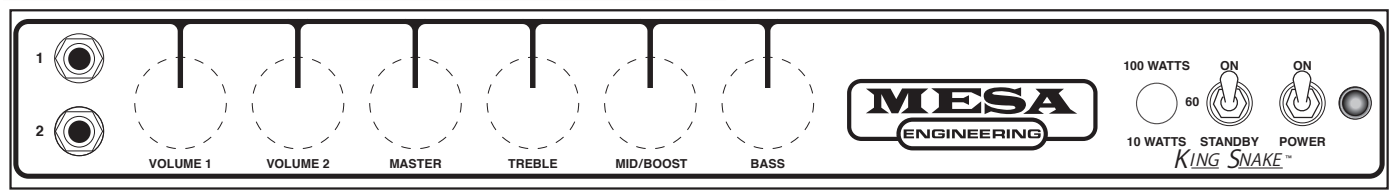
ユーザー・セッティング・テンプレート

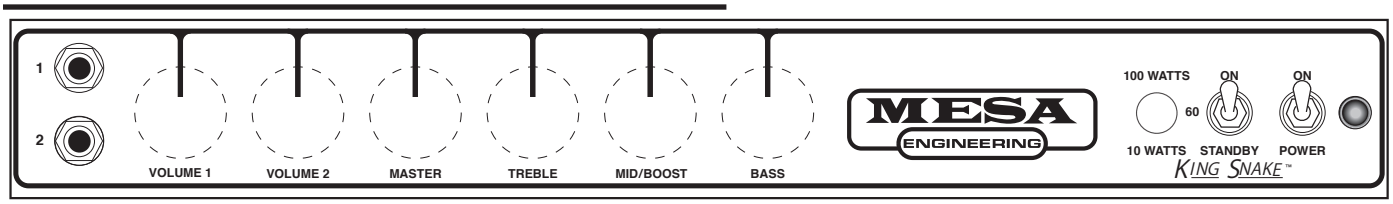












真空管のノイズについて：

状況によって、真空管のノイズを経験したことがあるでしょう。危険性があるというわけではなく、トーンに影響するものです。真空管の交換は電球を変えるようなもので必ずしも技術者に依頼しなければならないというものではなく、実際にやってみるとそう難しいことではありません。(ですが、やはり慣れていない方には楽器店に相談の上、技術者による交換を依頼することをお勧めします)。

真空管を交換する際に最初に我々がお勧めしたいのは、アンプを安定した台の上に載せて頂くことです(そうすれば腰を曲げることなくアンプ内部の真空管を確認出来ます)。また、真空管を交換する際に照明が当たってチューブソケットがはっきり見えます。アンプを使用した後で真空管に触る際は、大変高温になっていますので十分に注意して下さい！　まだ熱を感じる場合は、布きれ等を使って真空管を持つようにします。また真空管のシルバーの先端の下のガラス部分はあまり熱を帯びていないのでそこを持った方が交換しやすいはずです。
また真空管をソケットに固定する際も、外す際と同様に優しく持ちます。

パワー管の問題を診断する：

パワー管の問題は主に二つあります：ショートか、ノイズです。たいていそのどちらかの問題に陥るのですが、診断と処理は通常シンプルです。

ヒューズが飛ぶときは、軽度か重度かに関わらずたいていがパワー管の故障が原因です。軽度の場合は、電子流が制御格子を超えて、過電流が流れるというものです。音が歪んだり少しハムノイズが聞こえてきたりする場合は、アンプをSTANDBYにしてすぐパワー管をチェックします(赤くなっているかを確認します)。ショートしてる管がバイアスを下げるためたいていペアの二つが熱くまた発光していますが、一つだけが熱く発光している場合は、それだけが原因です。数分間赤くなってなければ、他の二つは問題ないでしょう。

この場合は物理的に真空管の内部でショートは起こらず(電子流が暴れているだけです)、しばらくSTANDBYにしてそれからONに戻せば、一時的には問題はなくなっているはずです。それからまた真空管をチェックして、再び同じ問題が起こるようなら、問題のある真空管がオーバーヒートを起こすので特定することが出来ます。

重度の故障の場合はあまり問題は簡単ではなく、最悪の場合は真空管の内部でショートが起こり、スピーカーから大音量のノイズが発生します。その場合はただちにアンプをSTANDBYの状態にして下さい(おそらくそれまでの間にヒューズが飛びます)。またそのようなショートの場合は、真空管内部の部品同士が接触し、故障の状態になります。パワー管の交換と、SLO-BLOタイプのヒューズの交換を行い、このマニュアルに書いてある方法で再びアンプの電源を入れます。

真空管のノイズ：

ノイズはしばしば真空管内の汚れが原因だったりしますが、真空管のガラスを指で軽く叩いてみると、ノイズの質が変化して音が聞こえたりします。しかしながら、12AX7を指で軽く叩いたときにスピーカーから何らかのノイズが聞こえるのは通常の状態です。INPUTジャックに近い管の音は大きく聞こえるもので、何故なら二つ目の12AX7管がアウトプットを増幅しているからです。

パワー管は通常指で叩いても常に静かなはずです。叩いた時にパチパチやシーッと音を立てるときは、おそらく問題があります。パワー管のノイズを確認するには、アンプをSTANDBY状態にして、問題のあると思われるパワー管をソケットから抜いて、また戻してみます。
ハムノイズが聞こえるようなときは、プッシュ・プルの真空管マッチングバランスが崩れています。問題があると思われる真空管を突き止めるときはいつも、POWERスイッチやSTANDBYスイッチを常に片手で触れながら、トラブルが発生したときにすぐにOFFに出来るようにしておきます。

もし問題がどこにあるか分からないときは、疑わしいものだけを新品の真空管に交換する方法をお勧めします。チューブ交換の方法については、前述の説明を参考にして下さい。同じチェックをするだけなら、技術者にアンプを送って真空管交換を依頼するよりもご自分でするほうが手間ではないかも知れません(それでもやはり自身での交換に不安がある場合は、最寄りの楽器店にご相談下さい)。

プリアンプの真空管の問題を診断する：

チューブ仕様のアンプを使用したことがあれば、プリアンプの真空管ノイズを経験したことがあるかも知れません。しかし、これがすぐに故障に繋がるというわけではありませんので、安心して下さい。この不安を解消する一番の近道は、真空管を交換することです。

最初に、なるべくアンプのパフォーマンスを落とさないためにも、少なくともいくつかの予備のプリ管を準備しておくのが良いでしょう。ちょっとしたプリ管の問題というのは、主に二つのカテゴリーに分けられます：ノイズと、マイクロフォニックノイズです。ノイズの種類は、パチパチ音であったり、ホワイトノイズ、ヒスノイズ、ハムノイズ等があります。マイクロフォニックノイズとは、ゲインや音量を大きくしたときに、金属的かつ周波数の高いサウンドでハウリングを起こすものです。マイクロフォニックノイズは、楽器側の音量を絞ったり、楽器をアンプから離すことでハウリングが止まるかどうかで、問題を分けることが出来ます。
(ハウリングがピックアップのフィードバックによるものであれば、これでハウリングが止まるからです)。また機器の振動やショックによっても引き起こされます("マイクロフォンを叩く"というのが、マイクロフォニックノイズの語源になっています)。

１つのモードやチャンネルのみでプリ管の問題が起こるのであれば、その問題を解決する最善の方法は真空管の交換です。反対に、特定のモードやチャンネルにトラブルの原因が絞れない場合は、全てのモードやチャンネルに関わっている、プリ管に問題があるのかも知れません。
あるいは、可能性は低いですが、ドライバー真空管に問題があるかも知れませんので、特定のモードやチャンネルに特定できない場合は、ドライバー管を交換する方法もあります。ドライバー管の問題は、一般的にパチパチ音やハムノイズがアンプの出力から聞こえる、または全てのモードでアンプの出力が弱くなるという症状となって現れます。
たまに弱ったドライバー管がアンプのサウンドをフラットかつ生気のないものにすることがありますが、ごくまれであるため、同様の問題が生じた場合はやはりパワー管の劣化が原因と考えられます。

トラブルの原因が特定できない場合に、一番早くて確実な方法は、、プリ管を同時に交換することです(その後どこに問題があるか分かったときのために、外した真空管を保管しておいて下さい)。INPUTジャックに近い真空管のサウンドがノイズっぽく感じられるかも知れませんが、それはその真空管が一番最初に信号が通る真空管であり、その後で出力が他の真空管により増幅されていくからです。その理由から、"インプット・ソケット"(通常V1と表示されています)に装着する真空管は最もノイズが少ない物を選びます。
プリアンプの後段 -パワー管の直前- の真空管にノイズがなければ、ほとんど問題は発生しません。このアンプには最も適正な真空管が装着されていますので、真空管を交換する場合は全部一度に外すのではなく、一つ一つ外して取り付けるようにして下さい。また問題の無かった真空管を戻す時は、必ず元々装着してあったソケットに戻すようにして下さい。また真空管を交換するときは、アンプの電源をSTANDBYにしてから行って下さい(そうすることで、スピーカーから大きなノイズが出ることを防げます。
そうしないとたとえゆっくり真空管を取り外したとしてもノイズが発生します)。

もしアンプを運搬する必要がある場合は、アンプ本体(シャーシ)を新聞紙等で包んでください。また包んだアンプ本体と段ボール箱に間に、15センチ程の隙間("クラッシュ・スペース")を空けて下さい。エアーパッキン("プチプチ")等で包むのも良いですが、発泡スチロールはなるべく使用しないで下さい
(運搬中に発泡スチロールが擦れて、その粉がアンプ内部に入り込み、電子部品に損傷を与える可能性があります)。

プリアンプ管は一般的には劣化することはありませんので、気分的な交換はあまり良いアイデアとは言えません。もし交換しても結果が変わらない場合は、元に戻してください。まれなことではありますが、もしトラブルシューティングの手順の中で損傷していることが分かった場合は、適切に交換を行って下さい。

注意：プリ管を指で軽く叩いた時に金属っぽい音がするのは異常ではありません。真空管からパチパチ音等が出力されない限りは、通常通りに使用することができます。

スピーカー・インピーダンス・マッチングと接続ガイド:

インピーダンス:

スピーカー接続において最も基本的で重要なのは、位相を正相にする事です。これにより素晴らしい音を出力する事が可能になります。これはそんなに難しい事ではありません。負荷についていくつかの事と、最適な負荷でスピーカーを接続する事を理解すれば良いのです。

MESA/Boogie アンプは、４オームと８オームを扱う事が出来ます。真空管アンプは、４オーム未満でドライブする事はしないで下さい。;これを行うと、出力トランスを損傷する可能性があります。２オームを扱う事の出来る数少ないアンプ（例えばMESA（メサ）のBass 400+ ）であれば大丈夫です。反対に高い抵抗値（例えば１６オーム等）の場合はアンプを傷める事はありません。

ミス・マッチング:

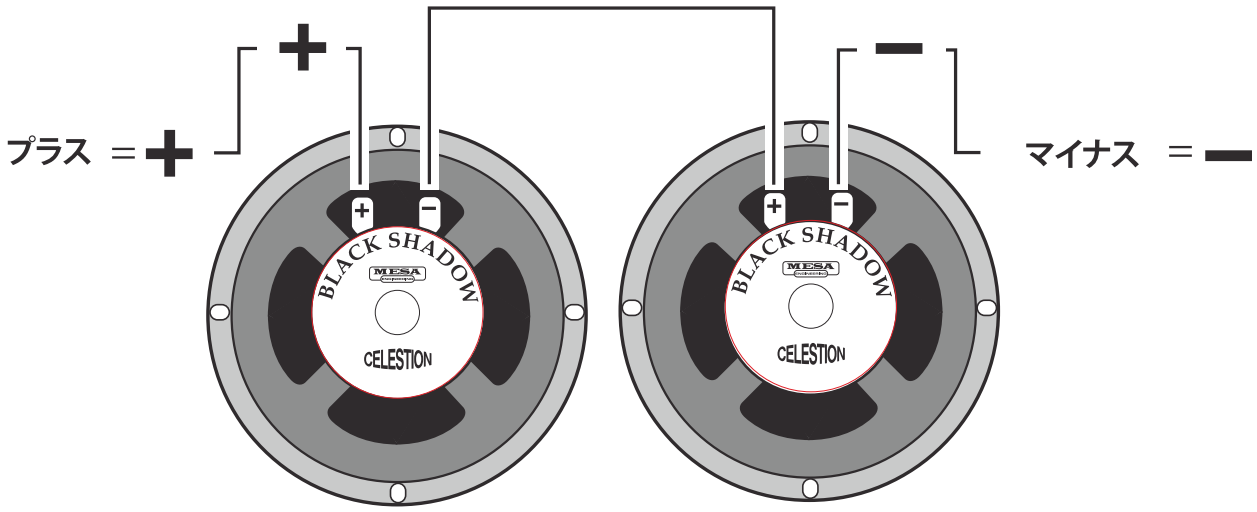
高い抵抗値（例えば８オーム出力を16オームのキャビネットに接続）でドライブすると、少しフィーリングが異なり、レスポンスが際立った感じになります。少しのミス・マッチであれば、トーンが若干暗く、出力とアタックが少し弱く、レスポンスが少し速くなる程度です。スピーカー・キャビネットが複数になると、ミスマッチは選択肢の１つになるほどです。

キャビネット・インピーダンスの算出方法:

お持ちのスピーカーが１台の場合は、そのスピーカーのインピーダンスとアンプのインピーダンスを合わせて下さい。複数のスピーカーをお持ちの場合は、アンプにかかる負荷を計算しなければなりません。複数のスピーカーの接続方法は次の３種類になります。:

シリーズ（直列）:

スピーカーを直列に接続した場合、それぞれのスピーカーのインピーダンスを単純に加算します。例えば、８オームのスピーカーを２台直列に接続した場合は、16オームになります。



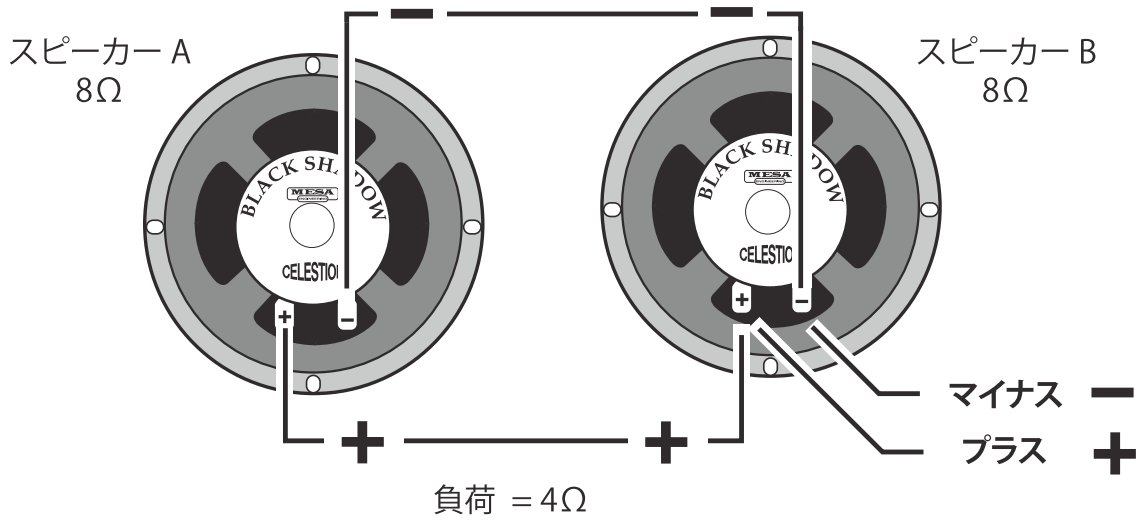
スピーカー A＝8Ω　　スピーカー B＝8Ω

シリーズ（直列）: スピーカーAのマイナス端子と
スピーカーBのプラス端子を接続

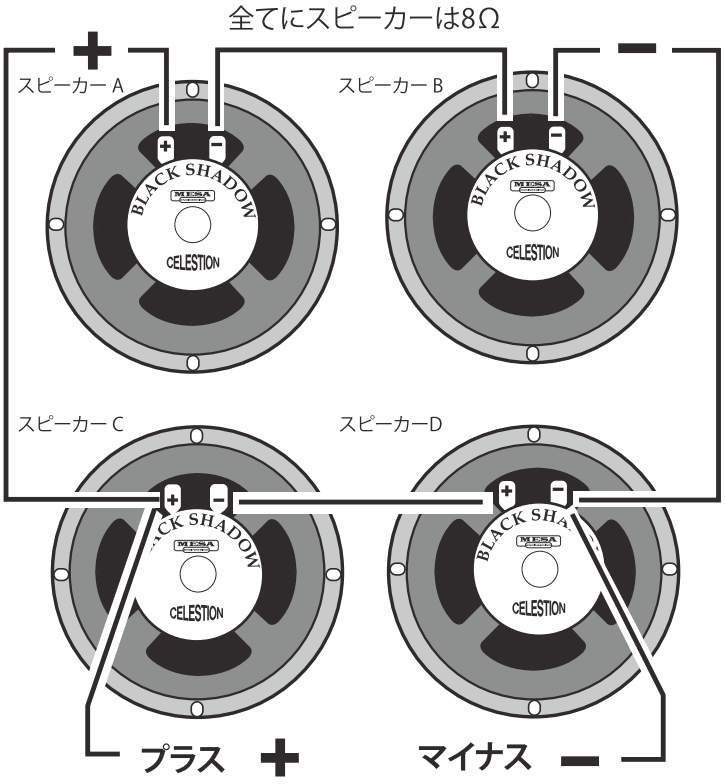
スピーカー・インピーダンス・マッチングと接続ガイド（続き）:

パラレル（並列）:

スピーカーを並列に接続した場合、スピーカーの抵抗値は下がります。２台の８オーム・スピーカーを並列に接続した場合、負荷は4オームになります。接続するスピーカーが全て同じ抵抗値であれば計算は簡単ですが、異なる抵抗値のスピーカー（例えば、8オームと4オーム、16オームと8オーム等）を並列に接続する場合は、少しややこしくなります。計算式は、それぞれの抵抗値をかけ算した数値を、それぞれの抵抗値を足し算した数値で割ります。例えば８オームと４オームであれば、8×4÷（8＋4）＝2.6666オームになります。パラレル（並列）：スピーカーAのプラス端子とスピーカーBのプラス端子、スピーカーAのマイナス端子とスピーカーBのマイナス端子をそれぞれ接続。



シリーズ（直列）とパラレル（並列）の組み合わせ:



これは、２セットの直列接続したスピーカーを並列に接続する組み合わせです。ここで重要なのは、全てのスピーカーの合成抵抗値が低くなり過ぎてアンプに負担をかけない様にする事です。

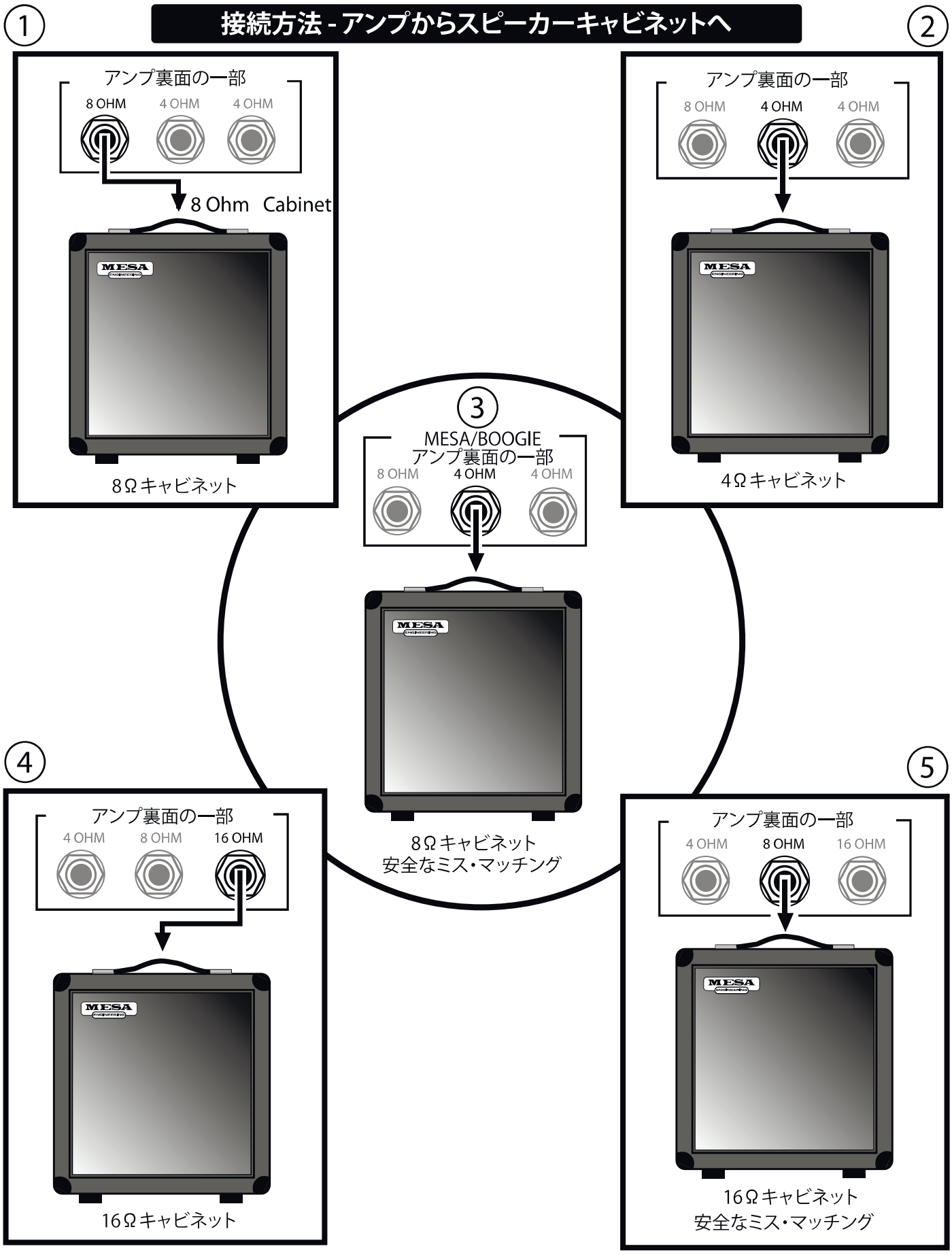
スピーカーAのプラス端子とスピーカーCのプラス端子を接続。

スピーカーAのマイナス端子とスピーカーBのプラス端子を接続。次にスピーカーCのマイナス端子とスピーカーDのプラス端子を接続。

そして最後にスピーカーBのマイナス端子とスピーカーDのマイナス端子を接続します。

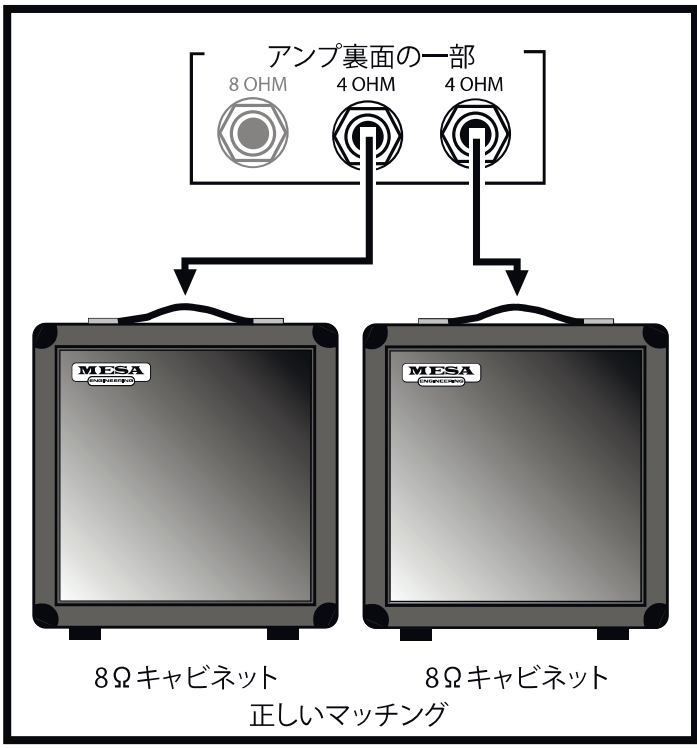
４台の８オーム・スピーカーをシリーズ・パラレル接続した時の合成抵抗値は、８オームになります。

接続方法 - アンプからスピーカーキャビネットへ

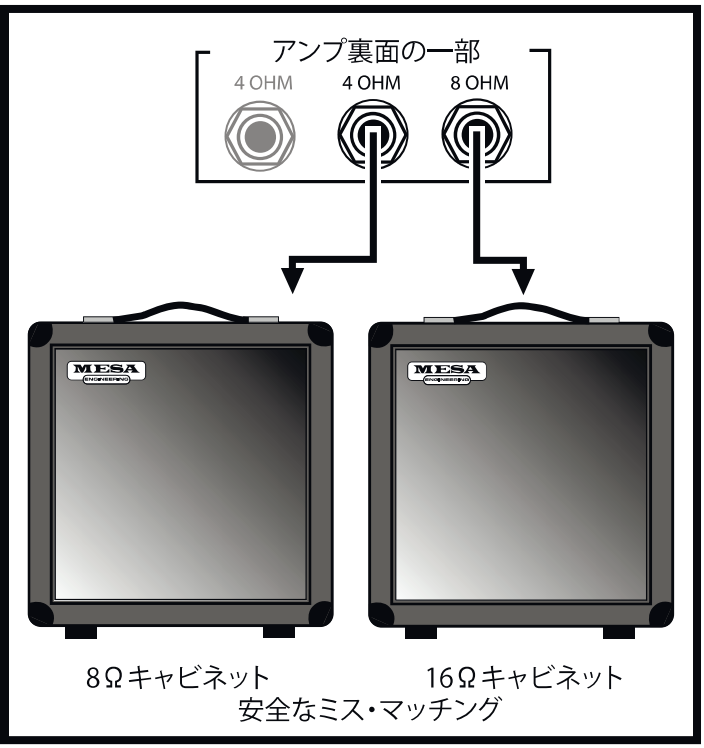


接続方法 - アンプからスピーカーキャビネットへ

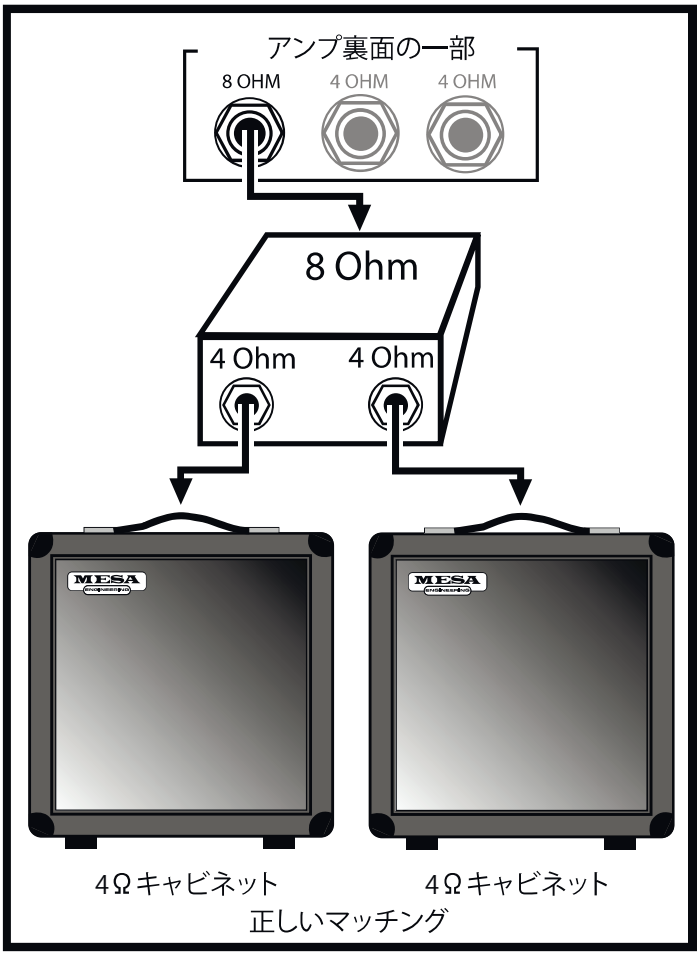
6



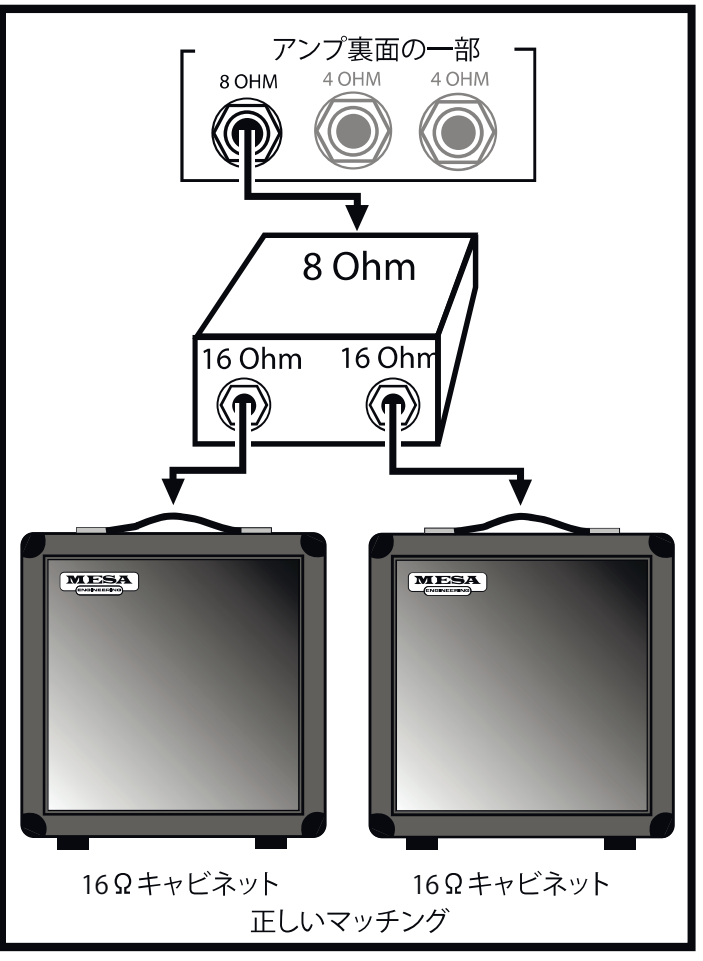
7



8

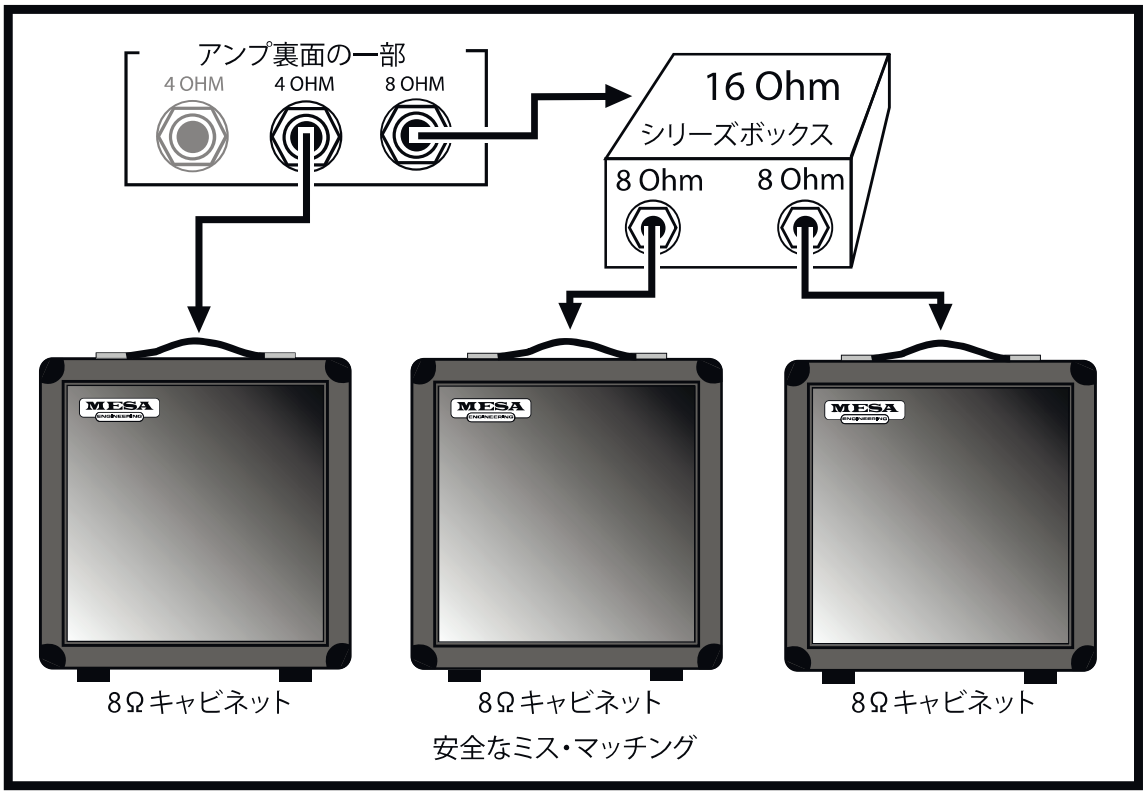


9

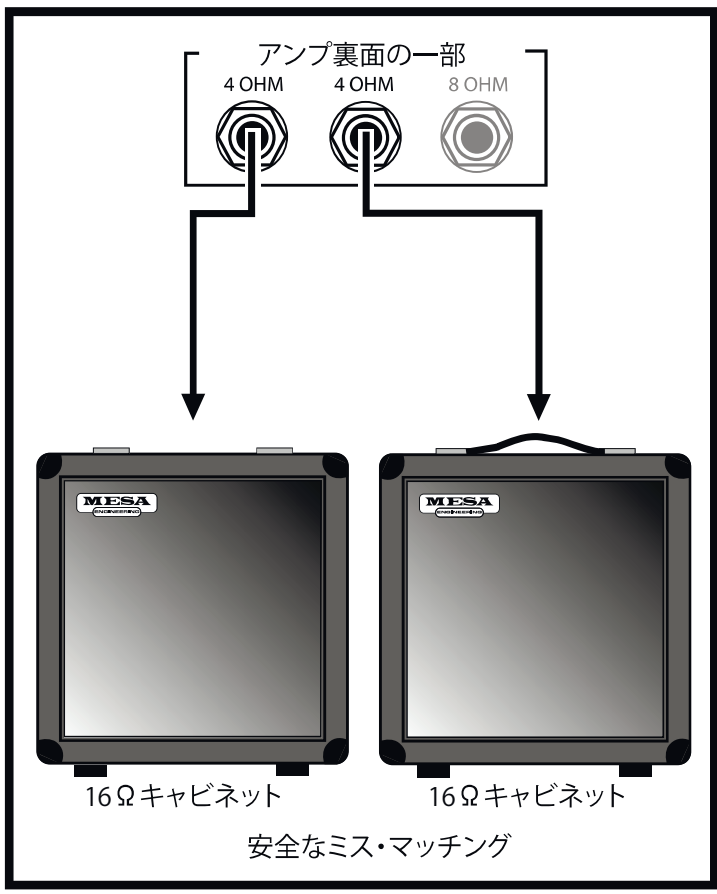


接続方法 - アンプからスピーカーキャビネットへ

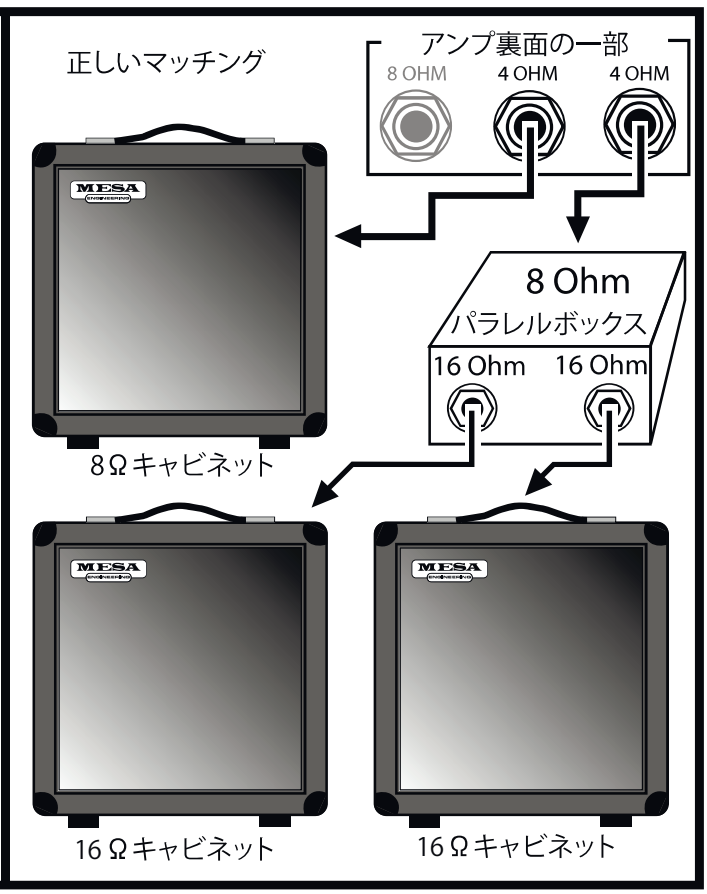
⑩



⑪

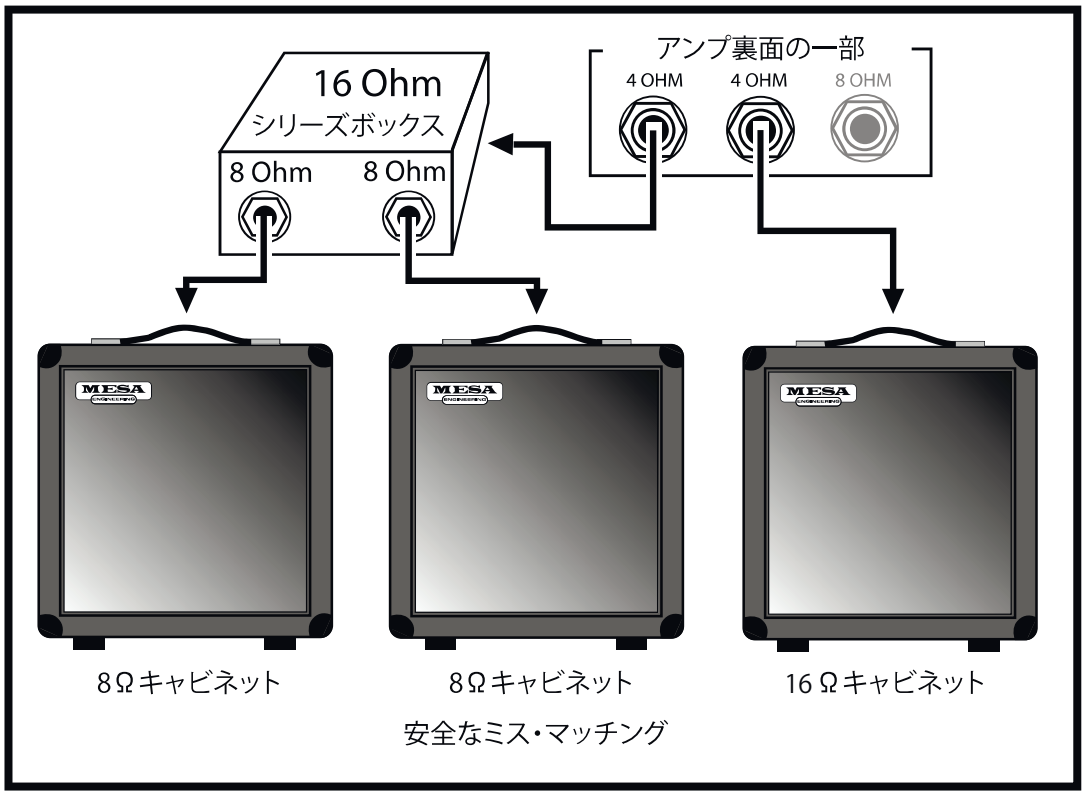


⑫

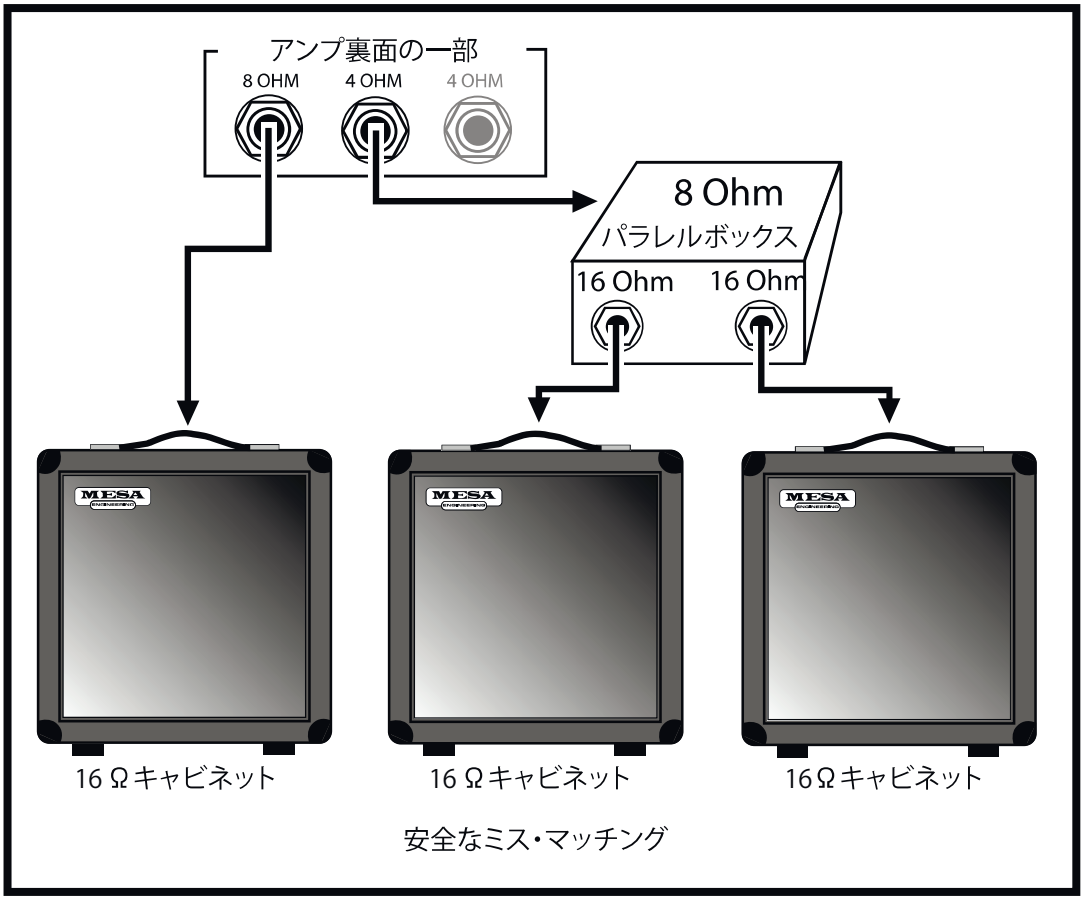


接続方法 - アンプからスピーカーキャビネットへ

⑬



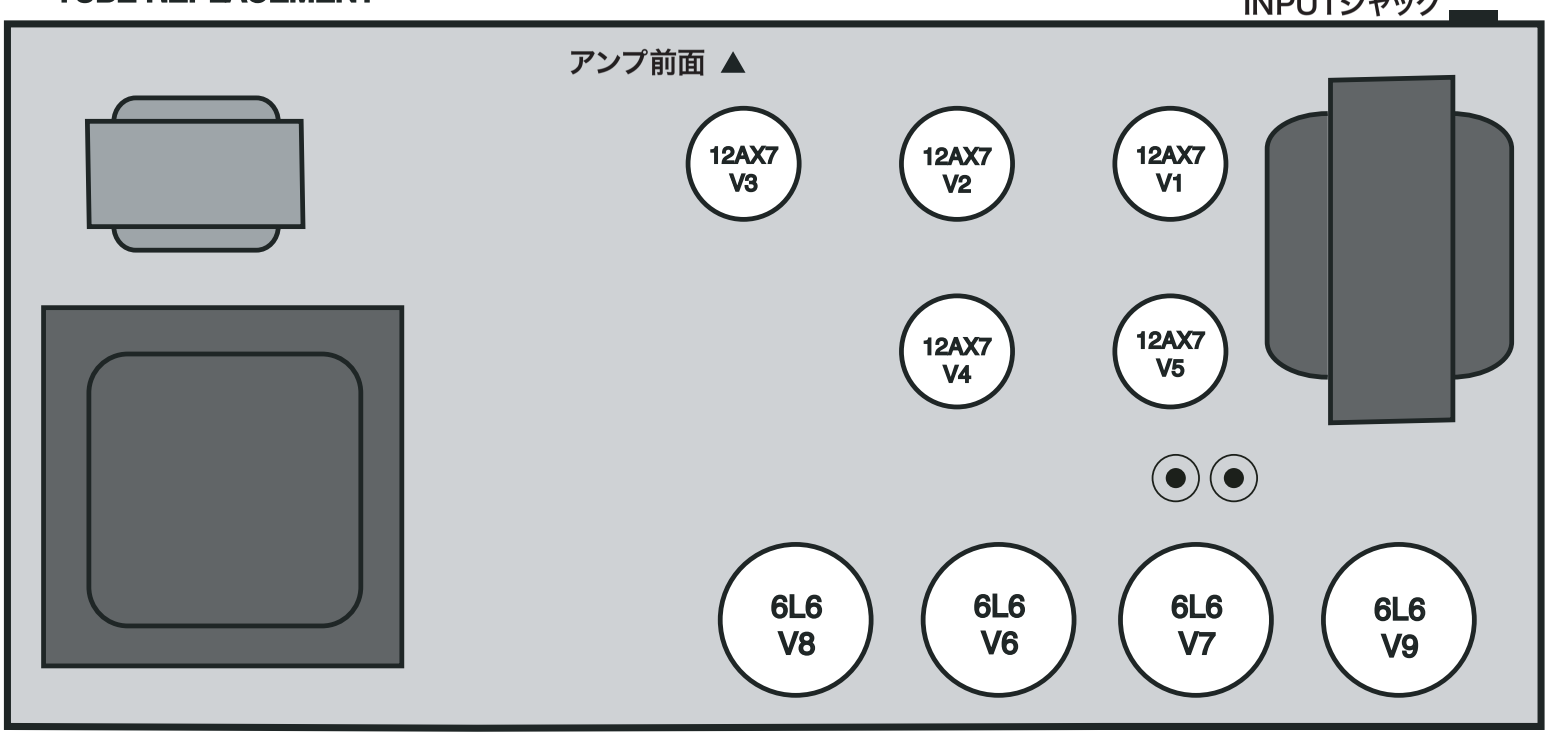
⑭



真空管を交換する前に、必ずPOWERとSTANDBYスイッチをOFFの状態にして下さい！

King Snake COMBO

TUBE REPLACEMENT



INPUT 1 PREAMP TUBE TASK CHART

V1A - Gainステージ第一段
V1B - Gainステージ第一段

V2A - Gainステージ第三段
V2B - Gainステージ第二段

V3A - Gainステージ第四段
/エフェクトループ・センドステージ
V3B - エフェクトループ・リターンステージ

V4A - リバーブ・ドライブステージ
V4B - リバーブ・リカバリーステージ

V5A - ドライバーステージ
V5B - ドライバーステージ

INPUT 2 PREAMP TUBE TASK CHART

V1A - 使われません
V1B - 使われません

V2A - Gainステージ第二段
V2B - Gainステージ第一段

V3A - Gainステージ第三段
/エフェクトループ・センドステージ
V3B - エフェクトループ・リターンステージ

V4A - リバーブ・ドライブステージ
V4B - リバーブ・リカバリーステージ

V5A - ドライバーステージ
V5B - ドライバーステージ

POWER TUBES

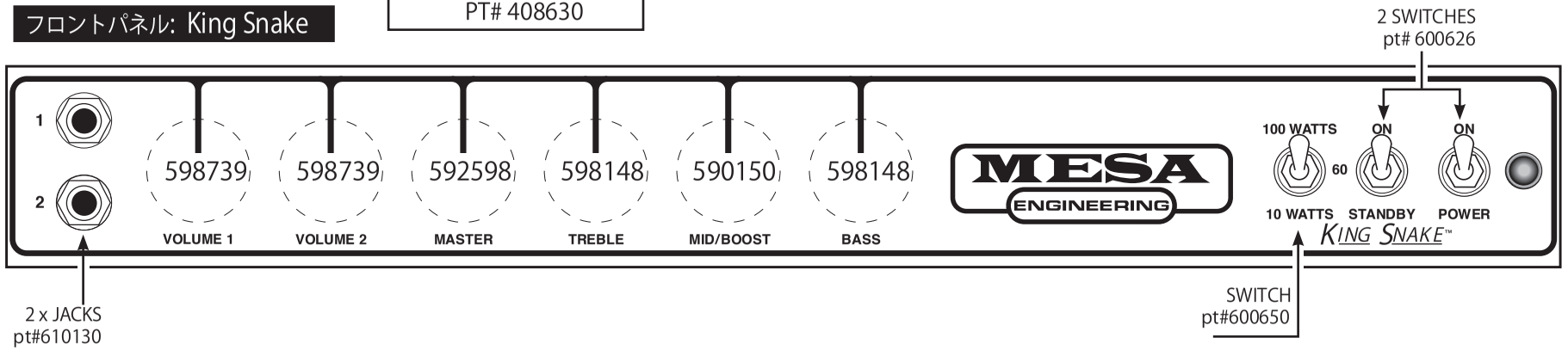
100 Watts = V6, V7, V8, V9

60 Watts = V6, V7

10 Watts = V6, V8

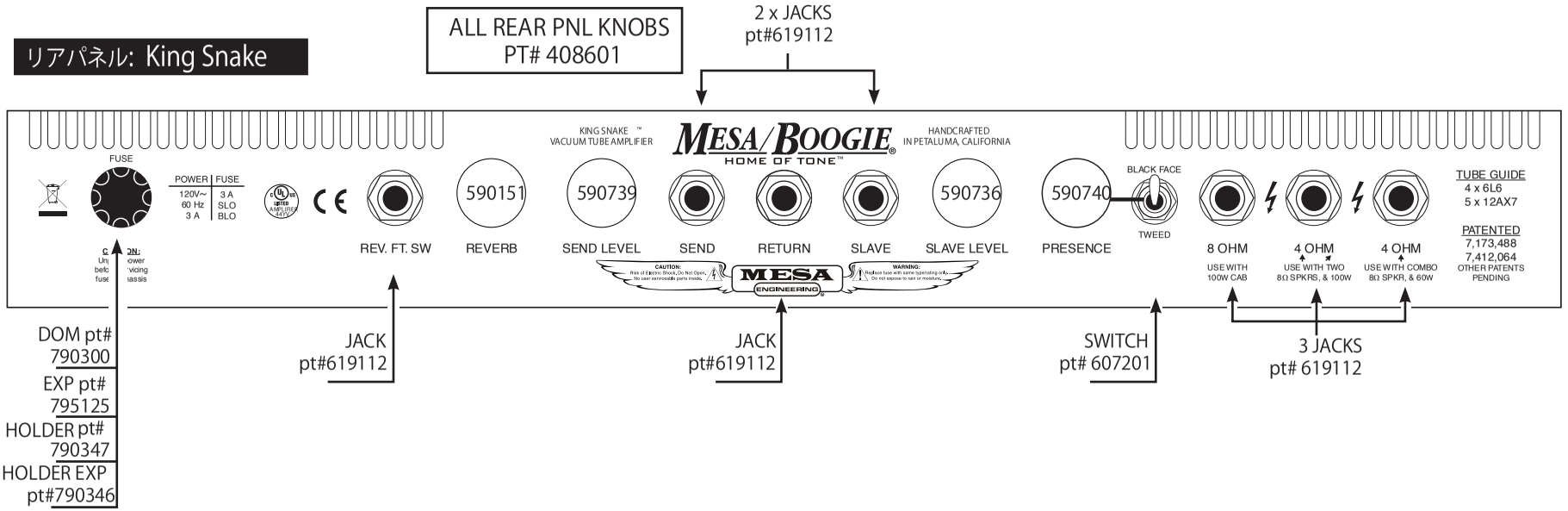
フロントパネル: King Snake

ALL FRONT PNL KNOBS
PT# 408630



リアパネル: King Snake

ALL REAR PNL KNOBS
PT# 408601



The Spirit of Art in Technology™

MESA ENGINEERING®

正規輸入代理店

株式会社　キョーリツコーポレーション

カスタマーサポート

〒103-0012
東京都中央区日本橋堀留町 1-9-11
　NEWS 日本橋堀留町ビル 10F
TEL : 03-5614-4133 FAX : 03-5614-2166
E-MAIL : support@kcmusic.jp